



小さな場所で
ダンス・ダンス・ダンス！

オクノミチミチ

1 オルターポップ・ファクトリー

フラグランズの三人娘は公称五センチの小さな体で元気いっぱい歌って踊る。歌は録音済みの音源であり、彼女たちの生の声はほとんど客席に届かなかったが、だれがそんなことを気にするだろう。不思議な振りつけ、息の合ったコンビネーション、全身全霊のパフォーマンスで、曲の指し示す世界を余すところなく表現しているのだから。フラグランズの踊るところ、日は射し、風はそよぎ、視界は開けて、生きとし生けるものが躍動する。そこには手放しの喜びが、思いがけない出会いが、待ちわびた和解が、ささやかながらも楽しい未来がある。見ればわかる。そう、見なければ！ だからこそぼくらは彼女たちのライブのあるところ、北へ、南へ、歩行者天国の路上へ、地下のライブハウスへ、CDショップの片隅へ、デパートの屋上へ、期待に胸躍らせて飛んでいくのだ。

カユプケです！

アチャポです！

ノンノです！ 三人揃って！

フラグランズです！

それぞれが片手を上げて名乗りをあげる。「三人揃って」のくだりて左右をキョロキョロうかがってから、胸の前で拳を折り曲げる。キョトンととぼけたような顔も忘れちゃいけない。それがお決まりの挨拶だった。ぼくらはみんな、それを見るのを楽しみにしていた。一緒にやるのを楽しみにしていた。「フラグランズです！」と大声で唱和するのを楽しみにしていた。

けれど、その日はまだできなかった。フロアには三千の客がひしめいて、彼女たちの登場を今か今かと待ちわびているのに、ステージは一向に明るくならない。それとももう来ているのだろうか？ ぼくらの目に見えないだけか？ 「隅っこでこっそり踊っていたりして」「それでクスクス笑ってんのよ」「やりかねない！」とぼくらはささやき、ほほ笑みを交わす。だが、いくら目を凝らしても、そこにあるのはただ暗闇。前の出演者が下がってからすでに十五分が経っていた。

ユカルカのステージは楽しかった。二両のおしゃまなSL娘は臨時敷設のレールの上をガトゴト転がりながら、日々の出来事をのんびり口ずさむ。週六でバイトをしている遊園地のこと、乗車してくるチビたちママたちに対する忌憚のない意見、糞をひっかけてくるハトとの連日の攻防、気になっている新米機関士の彼。歌声は煙突からポツポツと噴きあがり、客は頭上を漂う白黒取り混ぜた声を仰ぎ見ながら、そこに青空を、飛行機雲を、星空を見る。ポイント切り替えに伴って脱線するのはお約束で、それを合図に歌はラップに切り替わる。「わたしの前に線路がないよ。わたしの後ろにあってもしょうがないよ」「大変、あの子が緊急事態。わたしたちのラップは緩急自在」。機関士のなりをしたDJが、制御盤を装ったDJ卓を離れて、脱線SL娘をよいしょとばかりに元の軌道に戻す。「いつもわたしを助けにくる彼。あのヒトのために作りたいカレー」「だけどあんたの料理は華麗とは言えない。優しい彼でさえ『かれ一つ！』としか言え

ない」

異類のミュージシャンによる音楽の祭典、オルターポップ・ファクトリーは今年も両生類、人形、乗り物、猛獣の歌手やグループを招いて盛大に催されて、昨年大ブレイクを果たしたフラグラン스는トリの一つ前に予定されていた。大きな期待を背負いながら、しかし、いまだに現われない。脱線ラップのユカルカがフロアを沸かせて早二十分。温まった体も冷えつつある。遅すぎないか？ 満場の客がざわつきはじめる。パン！ パン！ パン！ 登場を促す手拍子にもヒステリックな調子が混じる。

「いえ、ちょっと準備に手間取ってまして」控え室に通じる廊下の入口に立って、サブマネージャーのモアイが説明した。「あと、えーと三十分。いえいえ！ 十五分。せめて十分待ってもらえれば」

「準備？」ハカタが首をひねる。フラグランスの三人はいつも身一つ、いや三つでステージに上がる。なんの準備が必要だろう。いつも弾丸みたいに飛び出してきたのに。一分でも一秒でも早くステージに立ちたいとばかりに。

「楽屋にはいるんですか？」巨体のヤマトが詰め寄ると、小さいわけではないモアイもまるで子供だった。「まさか行方不明とか？ なんか動揺してませんか？」

「これは地です！ 動揺なんて！」この新人マネージャーは確かに落ち着きに欠けるきらいがあった。

「窓は開いていませんか？ ロッカーは閉まっていませんか？ そこらをお散歩して、どっかにひっかかってしまったのかも。水槽はなかったですか？ 水鉄砲を噴く魚とか飼ってませんか？ まさかネズミは出ないですよ？ ネズミはダメだ！ あの子たちにとっちゃクマと同じだよ。猛獣だ！ カーペットの下は探しましたか？ まさか踏んづけたわけじゃないだろうな！」ヤマトは悪い可能性をいくらでも思いつけるようだった。「入れてください。おれも探しますよ。おれが探せばきっと」

「いやもう本番なんで！」

「ヤマト氏ヤマト氏、落ち着きなさい」オキヤが横から割って入る。「そういうのは良くないですって。いくらあの子たちが許したからと言って」

フラグラン스는特別な来歴を持つグループだった。長い不遇な時期を熱心なファンによって支えられてきた。中でも苦楽を共にしてきた十名あまりの最古参は身内も同然と言ってよかった。

「いつでも遊びに来てください」三人は常々そう語っていたのだ。「いつも一緒でしたもの。今さら来るななんて言わないですよ」「おみやげも持って来るななんて言わないよ！ アイス、マシュマロ、あんドーナッツ！」

「あの子たちはプロなんです。馴れ合いはよくないですし、しかも本番前の大事な時間じゃないですか。わたしたちはあくまでも部外者にすぎない。ここはスタッフの方々におかませしましょう。モアイ氏、一つだけ確認させてください。三人は中にいるんですね？」

「います」モアイはキツパリ言いきった。「ライブは間違いなく行ないます。あと五分か十分後に。今は気持ちを集中させてるんです。みなさんにはご心配をおかけしましたが、ここはお引き取り願えますか？ 彼女たちの晴れ舞台を楽しんでください」

「戻りましょう！」オキヤは身を翻して、連れの二人を促した。

廊下には著名な芸能人や関係者から届けられた祝いの花籠が並んで、そこにはフラグランス宛のものも多数含まれていた。事務所の先輩、歌と踊りを学んだスクール、交流のあるミュージシャン、出演したCMのスポンサー、番組を持っているラジオ局。入口近くに設けられた物販コーナーには、他の出演者のCDと混ざって、フラグランスの既発のCD数種が平積みだった。ゲップ・トーキョーは埋立地に作られた都内最大のライブハウスで、そのステージに立つことはどんなミュージシャンにとっても名誉なことに違いなかった。小さな場所でダンス・ダンス・ダンスしていた彼女たちはついにこの大舞台にまで登りつめたのだ。

それでも、入口正面に飾られた出演者写真で、フラグランスはいたって慎ましかった。いくらでも大きく引き伸ばせるものを、三人は顔もろくに見分けられないほど小さく収まっている。実物よりは大きいにしても、大声で「おーい！」と呼びかけなければ声が届かないほど遠く見える。ほかの出演者たち、オオサンショウウオやマネキン人形、レプリカSL、ましてやライオンと同じサイズにするのはやりすぎとしても、理由は別なところにあった。自分たちが小人であることをフラグランスは片時たりと忘れたことはなかったし、だれにも忘れてもらいたくなかったのだ。

「ライブは大丈夫でしょう。モアイ氏もそうおっしゃってましたし」独り言のようにオキヤがつぶやいたのは、ハカタが駆け足で横に並んだときだ。「楽しみましょう。楽しめるはずです。フラのライブはいつも楽しさ爆発、最高のエンタテインメントですからね！」

「ですが、そう言うわりにオキヤさん」ハカタはオキヤの顔をのぞきこんでいる。「いやに浮かない顔じゃないですか」

「ややっ！今日はノーメイクでしたか！」オキヤは独自のスタイルで知られるプロのバンドマンであり、音楽活動をしているときは顔に派手にドーランを塗りたくっているのだ。「いえね、ちょっと気がかりなことを小耳に挟みましてね。フラを、その、快く思っていないヒトたちがいるでしょ？」

「あいつらか！」二人の背後からヤマトが吠える。「BAKA8！コスパ！月見ライアー！それからそれから！」

「バカ言え！」ハカタが振り返ってヤマトを下からねめつける。「そんなのごく一部のファンが言ってるだけだ。本人たちはたいして意識してないぞ。フラがいようがいまいが、自分たちががんばるだけだ。認めるべきところは認めてるし、フラを敵視する理由がない。ぼくは全員にインタビューしてんだ。みんな、いい子たちばかりだ！」

ハカタはフリーの音楽ライターで、人生のほとんどの時間を音楽の視聴、音源の収集、ライブへの参戦、ミュージシャンへのインタビュー、記事の執筆に捧げているのだ。

「おれだって本人が直接にかするなんて思っちゃいないさ。まわりの連中がなにかしないか心配なだけだ。コスパなりBAKA8なりには特にいかれたファンが多いじゃないか。中にはいかれたスタッフがいないとも限らないし」

「どうせ口先だけだろうが。便所の落書き、ネットの書き捨て、雑魚の雑音、寝太郎の寝言。いちいち取り合ってどうすんだよ」

「いや、必ずしもそうとばかりは」オキヤがぼつりと口をはさむ。「あの子たちの一族に恨みを持つ一党がいるのを聞いたことはないですか？ そいつらが、今や一族の星となったあの子たちを亡きものにしようと企んでいるという噂がありましてね。フラに対する悪感情がじかに実害につながるとは考えにくいですが、そこにうまくつけこんで、積年の恨みを晴らそうとしているとか」

「恨み」ハカタは繰り返す。思い当たる節がないでもなかった。「邪悪な小人」を糾弾し、「駆逐すべし」と煽るチラシを見たことがある。「つぶされても文句言えないよね。小さいのが悪いんだもの」というつぶやきをどこかで聞いたことがある。

「恨みと言や、あいつもあるだろ？ あのライオン野郎」ヤマトが声を潜める。フラグサンスのあとに控えているライオンズ・マンソンはオルターポップ界の一番の出世頭で、今回のイベントにおいて堂々のトリを飾る予定だった。「ポンリズムをカバーしたいと申し出たのをフラがはねつけた件。やつはそれを根に持ってるはず」

「噂だけだな」

「事実さ。あの成り上がりライオン野郎は芸能サバンナにふんぞり返って、やれ、あの曲をご所望だ、あのブタ畜生に焼きを入れろ、あの牝ウサギをさらってこいと、好き勝手やってやがるんだ。百獣の王が聞いて呆れる。悪業の王って呼んでやるぜ！」

ライオンのロック・ミュージシャンであるライオンズ・マンソンは、尊大な言動や過激なパフォーマンスでその名をとどろかせていた。ごく最近も、シンガー・ソングライターとして売り出し中だった、とある女性歌手を食ってしまったという事件が耳に新しい。事実関係がうやむやになったのは、ライオンズが所属する業界最大手の芸能事務所、エイフェックスの圧力のせいだという。当の歌手バニー・ピョンコは公式には自身の音楽性について悩むところがあって一線を退いたことになっていた。

「いやいやいや！」オキヤが激しくかぶりを振る。「噂！ 噂！ これはあくまでも噂にすぎません。わたし、余計なことをしゃべりすぎたようです。忘れてください。行きましょう！」

フラグランス！

フラグランス！

フラグランス！

分厚いドアのむこうでは満場の客がグループ名を連呼して、もはややけくそのように手拍子を繰り返していた。「もう始まりますよ。入りますか？」会場スタッフが入場を促すが、オキヤ、ハカタ、ヤマトの三人はドアの前に立ちすくんだままだ。たがいの顔をのぞきこむ。無言。だが、考えていることはわかる。この先に待っているものがこわいのだ。天国か、それとも地獄なのか。喜びの粒子をまき散らしながら、だれも見ただことのない地平へと誘う、いつもの多幸感あふれるステージか。それとも、それとは正反対の、失意と怒号、悲嘆、阿鼻叫喚渦巻く地獄絵図か。そして、その中にはあるいは、この場にはまったく似つかわしくない「してやったり」のほくそ笑みが混ざっていないとも限らないのだ。

爆発。轟音。世界が弾け飛んだかに思えた。先にドアへ手をのぼしたのがだれかはわからない。もつれ合うようにして押し開けたドアのむこうで、フロアは激しく沸騰していた。ヒット曲「

ポンリズム」の分厚いダンス・ビートに乗って、満場の客が上に下に飛び跳ねているのだ。三千の熱い視線がただ一点に集中する。まばゆいばかりに輝くステージで軽やかに舞い踊るは、おなじみフラグランズの三人！

アチャポ！

カユプケ！

ノンノ！

の三人！

いやいや、三人の姿は見えない。

なにせ、彼女たちはたったの五センチなのだ。

2 オン・ザ・道路

その小さな女の子たちは休日の歩道を走っていた。一人が携帯の音楽プレーヤー、一人が携帯の小型スピーカー、一人がお手玉のようにぷっくら膨らんだ袋を背負って、巨大な靴が絶え間なく行き交う危険地帯を進んでいた。靴はすさまじいスピードと圧倒的なパワーで迫ってくる。すぐ耳元をビュンとかすめ、すぐ鼻先にズシンと落下し、すぐ背後からドスンドスンと追い立ててくる。そのどの一つに触れただけでも一大事だ。はるか何十センチと撥ね飛ばされて、致命傷を負いかねない。踏んづけられたら一巻の終わりだ。靴の裏にカエルみたいに貼りついて、「ガムでも踏んだか？」とのぞきこんだ者を卒倒させてしまうだろう。

靴には流れがあり、速度がある。流れにうまく乗って、速度を合わせることが肝心だった。一定の方角へ一定の速度、一定の歩幅で靴が進むかぎり、それほど恐れることはない。警戒すべきはイレギュラーな動きをする靴だ。這っているくらいのろい靴、せかせかと速い靴、なんの前触れもなしに立ち止まる靴、流れに逆らって進む靴、右へ左へふらつく靴。すべての動きを見極めて、瞬時に対応しなければいけない。三人は走る走る。スニーカーと革靴の間を抜け、ブーツの林を横目にキャリアバッグを迂回し、ピンヒールのヒールトソールの間をくぐって、ひたすら前へ前へ進み続ける。

道は平坦とはほど遠い。アスファルトの舗道はあばただらけで、冷えて固まった溶岩地帯のようだし、ガス工事電気工事水道工事によるツギハギがスムーズな進行を許してくれない。コンクリートにはしばしばひび割れが走り、ブロックとブロックの間には深い溝が刻まれて、いつ足を取られてもおかしくなかった。

そこには危険な落とし穴もあった。彼女たちの体が難なく収まるマンホールの鉤穴、歩道の隅に陣取る地下鉄の排気口、あらゆるものを飲みこむ下水溝の流出口だ。靴の流れに押し寄せられて、それらの落とし穴に近づくことがままあって、そのときは最大限の警戒が必要だった。暗く湿った地面の底、二度と這いあがれないかもしれない奈落の底への転落だけはどうしても避けたいところだった。

彼女たちは自分の背丈よりも長い杖を携行していた。極地を歩む探検家のように、いざというときはそれを水平に倒すのだ。そうすれば、どこかしらに引っかかってくれて、落下を食い止めることができる。杖は彼女たちの必需品で、いろんな場面で役立った。行く手を遮る紙くず、落ち葉、ビニール袋をなぎ払って道を切り開くことができたし、棒高跳びの要領で用いれば、より高いジャンプ、より長いジャンプが可能になる。急停止したいときは地面に突き立ててブレーキの役目も果たし、襲ってくる相手に対しては武器として用いることもできるのだ。

すぐ足元で繰り広げられている奮闘に気づく者は、しかし、ほとんどいなかったろう。彼女たちは靴の陰に隠れるほど小さかったし、目にも留まらないほどすばしこかった。仮に「なにかいる」と気づいたとしても、それが小人だとわかるかどうか。三人が背負っているプレーヤー、スピーカー、荷袋は指先でつまめるくらい小さかったが、それでも彼女たちには大きすぎた。体の大部分を隠していたので、それらの品物がなぜか勝手に路上を跳ねているようにしか見えなかったはずだ。

一瞬の油断が命取りになる危険な路上だったが、三人は決死の覚悟で臨んでいたわけではない。大きな期待に促されて、駆ける足も遅く感じていた。音楽が待っていたからだ。陽気な歌声に優しいコーラス、きらびやかなギターの音色、心沸き立つ太鼓のリズム、おどけたピコピコ電子音。そして、拍手喝采だ。いたるところに人だかりがあって、そのすべてが音楽を取り巻いている。楽しげな音楽、悲しい音楽、悔いや迷いや怒りを経て、最後は喜びに突き抜ける音楽。だからこそ三人はここに来た。だれもが自由に音楽ができる場所、音楽がたくさんのヒトを結びつける路上のパラダイスへ。

歩道の隅に場所を得て、三人はプレーヤーとスピーカーを接続する。スイッチをオンして流れだすのは、すでにさんざん聴きなじんだ曲だ。声がかかるほど歌い、靴を履きつぶすほど踊り、すっかり体に染みついた音楽だ。三人はお祈りの文句を唱えたのち、胸高鳴らせながら位置につく。さあ、ステージの始まりだ！ 寝食を忘れるほど打ちこんだ練習の成果を今こそ存分に見せつけるのだ。

しかし、立ち止まる者はいなかった。そもそもだれの目にも入らない。彼女たちはあまりにも小さくて、そこらに転がるジュースの空缶やイヌの糞にさえ負けていた。おまけにこの広い歩道には、自己主張の塊のようなパフォーマーが大量にひしめいているのだ。アンプで増幅されたギターは空気をギョングョウ歪ませて、血を吐くようなヴォーカルが地面をのたうちまわる。クセだらけのアニメ声に、詰めかけたファンが熱いコールを送り、左右に鋭く指を突きあげる。黒光りした一団は手足をプロペラのように振りまわして、オラオラオラ！ と大暴れだった。三人がどんなに懸命に跳ねまわったとしても、それは直径五十センチの範囲を越えるものではなかった。スピーカーのヴォリュームを目いっぱいあげることもできたが、それではただの騒音にしかならなかったろう。

「なにが悪かったんだろ？」三人はお弁当を食べながら話しあった。歩道と公園を区切るフェンスの下、コンクリートの台座に座りこんで。「一所懸命やったのにな」「あんなに練習したのにさ」

気分が沈んでも、それで食欲が損なわれるわけではなかった。三人は自分の頭ほども大きなおにぎりにかぶりつき、魚型の醤油入れに詰めてきたお茶をがぶがぶ飲んだ。背負ってきた荷袋の中味はほとんど食べ物だったのだ。

「とにかくこれから精いっぱいやるしかないよ」

三人は顔を見合わせてうなずいた。ライブはまだ始まったばかりだ。携帯プレーヤーの電池が切れるまで全力でパフォーマンスを続けるつもりだった。

彼女たちの存在に最初に気づいたのは若い女性たちだった。あっ！ なにこれ！ 人込みから三人を指差して、「かわいっ！」「ちっちゃあいつ！」と歓声をあげて駆け寄ってきた。

「歌ってるよ！」「踊ってる！」「コロボックルだよコロボックル！ 初めて見た」「やだ、お人形さんみたい！」「なんかしゃべって！」「しゃべれんの？」

一曲を演じ終えるまで待って、三人は集まったお客さんに挨拶する。

「しゃべった！ しゃべったよ！」「すごいキンキン声！」「ごめん、なに言ってんのかわかんないんだけど」

彼女たちの声は甲高く、かつ尋常ならぬ早口なので、ぼくらの耳にはテープを早回しにしたような音にしか聞こえない。キュルキュル続く軋り音のところどころに、かろうじて意味のとれる単語が聞き取れる程度だ。三人はゆっくり話しはじめる。一語一語噛みしめるような、やや片言な話しぶりだった。

「わたしたち、歌手に、なるんです」

「ここに、毎週、来る、つもり、です」

「名前、おぼえて、ください。自己紹介、します。アチャポです！」

「ノンノです！」

「カユプケです！ 三人揃って！」

「フラグランズです！ よろしく、お願い、しまっす！」

深々と頭を下げる三人に、かつわいいっ！ と女性たちは悶絶して、手をたたいて笑いだす。三人にいろんなポーズをとらせては、デジタルカメラと携帯電話で写真を撮りまくり、「がんばってね！」「また来るね！」と手を振って、風のように立ち去った。

三人は置いてけぼりを食らったような気分だった。

「歌のことも踊りのこともなにも言わなかった」ノンノが頬を膨らます。「どこ見てんだか。失礼だよ」

「写真ばかり撮ってたね」カユプケが不満そうに首を振る。「お人形さんじゃないのな」

「最初はこんなもんだよ」アチャポは冷静に二人をなだめる。「見てくれただけで十分じゃないの。今度来たときはきっと歌を聞িয়েくれる。踊りを見てくれる。ファンになってくれるかもしれない。お友達を誘ってくれるかも。そうやって少しずつでもお客さんは増えていくよ。来週もがんばろうよ、ノン、カユ！」

三人は帰途についた。電池を使い果たしてもプレーヤーの重さは変わらなかったが、お弁当を詰めてきた荷袋だけは空っぽだった。これでは不公平だからと、ノンノは荷袋に小石を放りこんで釣りあいをとった。「なにもそこまでしなくても」「交代で一人休めばいいじゃない」と二人が言っても耳を貸さない。「三人で一緒にがんばるんだもの。同じ重さを背負わなきゃ」。しかし、張りきって詰めこみすぎたらしく、じきに「ソンノ パセーッ！」と言ってへたりこんだ。三人は笑った。何時間にもわたるパフォーマンスでくたくたに疲れきっていたが、気分は高揚していた。とにかくライブをやりきったのだ。最初の一步を踏み出したのだ。

翌週、同じ場所を訪れると、そこはヴァイオリンとパーカッション、キーボードを奏でる女性グループに占拠されていた。歩道をさらに三分ほど進んだところで、ギター弾き語りの熱唱デュオと、カラオケでアニメソングを歌うコスプレ女性がいたが、たがいに背をそむけあって、そこには深い谷間ができていた。ここを今日のステージと決めた。イベント広場に近いせいか、前回よりも多くのヒト、いろんなヒトが立ち止まってくれた。若いヒトやカップルが目立ったが、子供から老人まで年齢層も幅広い。外国人も親子連れも車椅子も法被姿も混ざっていた。

質問攻めに多くの時間が取られるのはいたしかたなかった。「きみら、本当にコロボックルなの？」「どっから来たの？」「みんな、そんなにちっちゃいのかい？」「いつもなに食べてるの？」

三人はニンゲンとおしゃべりすることにだいぶ慣れてきたようだ。

「出身はどんぐり山です。そういう名前なんです」アチャボが答える。「いいところです。秋になるとドングリがいっぱい獲れて、食べておいしくて、貯蔵もします。場所？ えーと、あつちかな」最初は東を指差して、次に西を指差した。

「正確に言えば、コロ、ポツ、クルです」カユプケはていねいに発音した。「ハッキリ発音しないところがあるんです。文字は小文字を使います。コロポックル。コロポックル。そう上手！ わたしの名前もそうですね。カユプケ。プの音はほとんど聞こえないです。聞こえないでしょ？」

「食べ物に好き嫌いはないです。食べれるものならなんでも食べます」ノンノは受け答えがややぶっきらぼうだった。「みんな、ものすごい大食いです。暇さえあれば食ってます。暇がなくても食ってるかな。一日六食は軽いです。そのわりに成長しないですけど。背丈？ わたしたちは高いほう」

「歌手になるのが夢なんだね？」という問いかけには、三人とも不思議そうな顔をした。「夢？ 違いますよ」「そんな夢は見ないです」「見れたらうれしいかも」

「いや、その、夢っていうのは、夜見るほうの夢じゃなくて、将来実現したいもののことだよ。それを夢っていうんだよ」

「へえ」「ニホン語難しいね」「じゃあ、それで」

写真撮影も恒例となったが、衣装に思わぬ難癖がついた。「そんな普段着とかじゃなくて、もっとかわいい服を着ればいいのに」というのだ。三人は困惑した。ライブのために新調した純白のステージ衣装だったのだ。ただ、どんぐり山からの長旅で相当くたびれていた。道路の土ぼこり、車の排気ガス、自分自身の汗にまみれ、どこで拾ったも知れぬ髪の毛、糸くず、食べカスがこびりついている。「コジキ芸人みたいって言われたけど、だれだろう？」「それ、褒められてないと思う。こっち来てから着替えたほうがいいのかな」「また荷物多くなるなあ」

三人のパフォーマンスをしっかりと見た上で感想を述べてくれるヒトも増えた。「がんばってるね」「元気が出るよ」「ちっちゃいのに偉いな」「楽しかった！」「応援するよ！」といったもので、似たり寄ったりのものではあったが、それでも十分うれしかった。言葉の一つ一つが確かな手応えとなって、三人を後押しした。

温かい眼差しや好奇の眼差しに混ざって、そこにはまた別の眼差しもあった。広大な公園の上空にはカラスが黒々と飛び交っていたし、路上ではハトがひっきりなしにうろついている。スズメたちはやまかしくさえずりかわしながら、いつのまにか近くに降り立っていた。車道を挟んで向かい側の花壇にネコを見かけたこともあって、女性に抱えられた毛むくじらのイヌが客に混ざっていたこともあった。そのすべてが捕食者というわけではなかったが、気まぐれでちょっかいを出してこないとも限らない。いくら警戒してもしすぎることはないのだ。

そして、そこには時折、得体の知れない眼差しも混ざった。人込みから飛んでくる針のような鋭い視線で、そこには紛れもない悪意が込められていた。身におぼえがなかったのも、三人は大いにとまどった。人込みに紛れてだれかは特定できなかったが、三人全員が感じているので気のせいではない。その眼差しを感じるたびに、三人は丸裸にされたような気分になってしまう。明

るいお日様も大勢の客も楽しい音楽もなにもかもが根こそぎ剥ぎ取られて、草木も生えないうそ寒い荒地に放り出されてしまうのだ。ここが自分たちの場所でないことを思い知らされる。

「そう、ここはわたしたちの場所じゃない」アチャポがメンバーに警告する。「親しいものはなにもない。守ってくれる仲間はいない。一步一步が新しいことの連続で、だからなにをするにも慎重でなきゃ」

「虫ならすぐに追い払うんだけど」ノンノが杖を振ってみせる。「ここは虫も少ないよね。カマキリもハチもクモもゴキブリも少ない。それはそれで寂しいかも」

「お祈りだけは欠かさないことよ」カユプケがあたりを見まわしながら言う。「だれが助けてくれるかわからないし。スズメさんもハトさんも悪いヒトたちじゃない。カラスさんはちょっと意地悪かも」

そのビヤ樽のような大男はしばらく前から歩道の隅に立っていた。さして興味もなさそうにフラグランズのライブを眺めて、近寄ってくる様子もなかったし、曲が終わっても拍手一つしない。声をかけたのはアチャポのほうからだった。ライブ後、客がごっそり立ち去って視界が大きく開けたとき、手をあげて「こんちは一つ！」と呼びかけたのだ。「ライブ見てくれてありがと一つ！」

それが自分に向けられたものだと知ると、男はひどくうろたえた。いったんは素知らぬ顔でその場を立ち去りかけたが、気が変わったのか身を翻して近づいてきた。「ここはダメだ」それが第一声だった。「やるなら中だ」

三人が訝っていると、プレーヤーとスピーカーを勝手につまみあげて歩きだした。人込みをかき分け、歩道の先にある入口から公園の中に入っていく。三人はすぐに追いかけたが、ニンゲンに足でかなうわけがない。追っても追っても背中はずかしく、絶望的な気分になった。やっとの思いで人込みを抜けると、一直線の道路が池に突き当たる地点まで必死の思いで走り続けた。道が左右に分岐するその場所に、男は銅像のように突っ立っていた。「イッカクル！ なにするんですかあ！」アチャポがそう叱りつけると、すんなりとプレーヤーとスピーカーを差し出してくる。「あっちは人通りが多くて、ゆっくり立ち止まって見れなかった。まわりがやかましかったから、きみたちは全然目立たなかったぞ」。いい場所に案内してくれたらしい。

とは言え、砂利が敷きつめられたこの場所はパフォーマンスにふさわしいとは言いかねた。自身の頭よりも大きな石がゴロゴロ転がる中で、飛んだり跳ねたりはできないのだ。男はポリエステルのバケツを拾ってきた。泥をきれいに拭いて裏返したら、ちょっとしたステージになった。小人たちにとっては四・五階建てのビルに等しい高さだ。男が地面に手のひらを置くと、ノンノはその上には乗らないで、腕を一気に駆けあがって、二の腕のなかばでバケツに飛び乗った。わあっ！ 池のほうを眺めて歓声をあげる。地面に立っている二人に「ピリカ ワー！」と叫んで、両手で大きく丸を作った。「踊れそう？」「落ちない？」アチャポとカユプケが尋ねると、ひとしきり跳ねて、縁に沿って一回りした。「大丈夫。できるよ。狭いけど」

とは言え、場所を変えるのは不安ではあった。これまでライブを見てくれたヒト、あるいはファンになってくれるだろうヒトをまるごと失ってしまいかねないからだ。数は多くなかったが、だからこそ大切なお客さんたちだった。「いたいた！」「ホントだ！」「こんなとこに！」見覚え

のある顔が何人か、目の前に立っていた。「こっちに移ったの？ よかった。探したよ。もう来ないかと思って焦った」「こっちのほうが全然いいね。ゆったりしてるし、見晴らしもいいし」「このバケツがステージなの？ かわいいね！」

そのうちの一人が、身につけていた花柄のストールをバケツの縁に沿って巻きつけてくれると、殺風景だったステージが俄然華やかになった。「汚れますよ」と三人は心配したが、あとで洗えばいいということだ。

客は多いときで十人を越え、携帯プレーヤーの電池が切れて、「みなさん、今日はありがとうございました」と最後の挨拶をするときも、かろうじて「みなさん」と呼ぶに値するだけの人数、つまり二人が残っていた。この日は確実にお客さんが増えたことを実感して、三人は気持ちよく帰途についた。

翌週、公園の同じ場所に行くと、そこには大きな段ボール箱が陣取って、その上に木の板が一枚載っていた。例のビヤ樽のごとき大男と、それと対照的にひよろ長い男がニコニコしながら両脇に立って、「お嬢様どうぞ」とでもいうように段ボールに手を差しのべている。「中には重しを入れてある。画板は接着剤でくっつけた。しっかり固定できてるはずだ」

わざわざ作ってくれたのだ。足元はしっかりとして広さも十分。これは立派なステージだ。ほかでもない、自分たちのための、自分たちだけのステージなのだ。パフォーマンスにも熱が入るというもの。一番冷静なカユプケでさえ、張り切りすぎたのか画板の端から転げ落ちてしまった。かぶりつきで見ていた女性の膝かけの上に軟着陸して事なきを得たが、「気をつけて！」と注意したそばから、今度はノンノが飛び出した。だれもが驚く跳躍力で、バッタのように何十センチと跳ね飛んだのだ。客の一人がかろうじて両手で受け止めて事なきを得たが、ステージに戻されたノンノがなにごともしなかったかのように平然と踊りを再開したので、これにはみんな大笑いだった。手持ちのレパートリーをすべて演じ終えると、これまで聞いたことがなかったほどの拍手が沸き起こった。まるで夏の蟬時雨のような。最高の日だった。

ライブを重ねるごとに客は増えた。少しずつではあったが、増えていることは間違いなかった。毎回顔を出す熱心なヒトもいれば、中には来るたびに新顔を一人二人と連れてくる律儀なヒトもいた。ただ、彼らは三人のある種の発言に焦っていた。憤っていた。「いらっしやい、お客さん！」「今日もお客さんがいっぱい！」「お客さん、ありがとう！」といった言葉遣いだ。「違うでしょ」「お客さんじゃない」というのである。三人は首をかしげた。「それじゃ常連さんですか？」「それとも、お得意様？」「お客様は神様だから、神様ですか？」。違う！「あのね、ぼくらはきみらのファンだ。お客さんなんて他人行儀はやめてほしい」「あなたたちを応援してんだもの。ライブには行くし、ヒトにも勧める。それもこれもファンだからだよ」「なにか困ったことがあったら遠慮なく言ってほしい。できることならなんでもするから」

ファン！ なんとというすばらしい響きだろう。フラグランズはいつのまにかファンを獲得していたのだ。見た目も年齢も職業もバラバラのヒトたちだった。頭がだいぶ禿げあがった中年男性もいれば、母親にいつも付き添われている幼い女の子もいた。どんな寒空でもTシャツ一枚の元気な若者の隣には、スズメのようにピイチクさえずって区別のつかない少女たちがいて、その背後には絶えずスマートフォンとにらめっこしている男性、小さいノートにひたすら鉛筆を走らせ

ている女性、リュックに手提げ袋にカメラとやたらと荷物の多い男性が並んでいた。「今日も仕事なんだけどまた来ちゃったよ」と、聞かれてもいないのにわざわざ報告するサラリーマンもいれば、だれとも口をきかないし目も合わさない、幽霊のような女性もいた。フラグランズのファンであるということを除けば、なんの共通点もないグループだった。たがいに興味があるわけでもなかった。職業や居住地どころか名前すら知らないことも珍しくなかったし、フラグランズのこと以外では二言と会話が續かなかった。それでも携帯電話の番号とメールアドレスは交換しあい、共通のメーリングリストを持っていた。情報を共有しなければならないからだ。連帯しなければならないからだ。

応援するという言葉に嘘はなかった。ライブの間じゅう口元に笑みを絶やさなかったし、拍手にも気合がこもっていた。三人が冗談を言えば率先して笑いだし、感想も胸の内に秘めておかない。「いいぞ!」「おもしろい!」「最高!」「かわいい!」とこれ見よがしに叫ぶのだ。道行くヒトよ、世界じゅうのヒトよ、見てくれ、ぼくらのかわいい三人を!　と言わんばかりに。

思い入れも強くなろうというものだ。なにせ彼女たちは風が吹けば確実に飛んでしまう、あまりにも小さすぎる女の子たちなのだ。身の毛もよだつ巨人の国にたった三人で乗りこんで、体を張ってがんばっている。どうしてほうっておけるだろう。どうして応援しないでいられるか。ぼくがわたしがおいらがあたいがわしが自分が守らなくて、ほかのだれが守るというのか?

その熱意が仇になることもないではなかった。ある日フラグランズの三人がいつもの場所に到着すると、なにやら揉めている。金髪を派手におっ立てたギター片手の青年が、おなじみのファンと言い争っているのだ。「あのロック青年が先にいてさ」とのっぽのファンが説明してくれた。「そこへヤマトが食ってかかったんだ。なにやってんだ、邪魔だ、どけ、そこはおれたたちの場所だぞって。そりやもう鬼のような剣幕でさ」

「よそ行く」アチャポは即断した。「ライブはほかの場所でもできるもの。喧嘩はダメ」

「あそこがベストなんだぞ」引きさがりはしたものの、ヤマトは納得していなかった。「人通りがほどほどにあって、スペースも余裕がある。池を含む公園全体を見渡せてロケーションも抜群。水面を渡る風も心地いい。こっちはずっとあそこでやってきたんだ。優先権ってものがあるはずじゃないか。既成事実化してたじゃないか。やつは先週、ライブをしているときに前を通りすぎた。そのとき、ここに目をつけたに違いないんだ。おれは許さないぞ。あの横取り割りこみすつとぼけ野郎が!」

「喧嘩はダメ」アチャポはなおも言い張った。「喧嘩するヒト、わたし、嫌い!」

「わたしたち、喧嘩はしないんです」カユプケが取りなすように口をはさむ。「喧嘩すれば、勝つヒトもいれば、負けるヒトもいるでしょ?　勝っても気分がいいとは限らないし、わたしたちは負けるほうが多い。だから、いつも逃げるんです。恥ずかしいことないですよ。弱いことが恥だったら、わたしたち、恥だらけじゃないですか。勝つのは大事なことじゃない。大事なことはほかにあるんです」

「場所はたくさんある」アチャポがあっけらかんと言う。「どこででもできる」

たしかにこのオヨギ公園は広かったし、ライブに適した場所はほかにもあるに違いない。この公園にこだわる必要もなかった。ほどほどの人出が見込める公園はいくらでもあるし、休日なら

歩行者天国に乗りこむ手もある。アキバハラ、キンザ、アラジユクの歩行者天国は路上ライブの本場として有名なところだった。

「どこにでも行く」ノンノが力強く言いきった。「わたしたち、歌手になるまであきらめないんだ」

しかし、なぜ？

そもそも彼女たちはどうして歌手になどなりたいのか？

彼女たちの仲間の大半は山に住んでいる。山菜やキノコを採集し、小魚や虫を捕って暮らしている。町にも少なからぬ数の仲間が住んでいるというが、見かけることはまずないし、なんらかの仕事に従事しているという話も聞かない。小人は小さく、世界は大きい。ニンゲンのおこぼれに預かるだけで十分に生きていけるのだ。現にフラグランズの三人だって、いろんなものを拾っていた。道端に落ちているたこ焼き、ドーナッツ、ソフトクリームのかけらを見つけるや、バネがはじけたみたいに飛んでいって、ほくほく顔で持ち帰るのだ。

「わたしたち、ちゃんとしたいんです」アチャポが少しムツとして言う。「拾えるものは拾いますけど、それはもったいないからです。わたしたちは拾い食いして生きるんじゃないくて、歌ってお金をもらいたいんです。それで食べ物を買うんです」

では、食べ物を得るために歌手になりたいのか？

三人は顔を見合わせる。「それだけじゃないんだけどな」「イタカンヤ？」「うん」

「話します」カユプケから話し始めた。「忘れもしません。あれは長い夏も終わるころ、ある日の昼下がりのことでした」

「それでもすごい暑かった」ノンノがうんざりしたように付け加える。「お日様がお空いっぱい、干からびてしまうところだった。いいかげん帰ろうと思ってた」

「でも、そこで見たんです」アチャポが神妙に続ける。「これまで見たことのなかったもの、すばらしいもの、信じがたいもの、この世のものとは思えないものを」

わたしたちは小さいので、普通は人込みに近寄りません。でも、わたしたちは普通でないことをしようと、いろいろ試していたんです。

その人込みはとりわけすさまじいものでした。遊園地の隣りにあって、休日はいつもにぎわってましたが、その日は顔ぶれが違いました。カップルもいたし、親子もいたし、よちよち歩きの幼児から、頭が灰かぶりになったヒトまで、いろんなヒトが混じってましたが、とりわけ目立っていたのは女の子でした。小学校中学校の、わたしたちとそんなに変わらない年頃の女の子たちが、一人で、二人で、グループで、いても立ってもいられないくらい興奮して道を急いでいたんです。それはまるで話に聞く、サケが川を遡る光景のようでした。背ぶれが日に焼けるほど、腹が川底をこすれるほどの大群が、裏返しされたお鍋みたいな巨大な建物目指して急いでいる。これはいったいなんなのか？ 気になってしょうがない。行ってみるしかありません。わたしたちは通りすがりの女の子の麦わら帽子に乗って、中に潜りこみました。

高く丸い天井はほとんど夜空も同然で、ライトがお星のように散らばって、地面は夜の底でした。そこをびっしり埋め尽くしたお客さんたちは、虫たちのように草木のように、ざわざわさ

さやき交わしています。かすかに流れていたBGMが急に途絶え、天井のお星が消えると、あたりは谷底のように静まり返りました。突如ステージがきらめいて、音楽が力強い足取りで流れだすと、わあっ！ と歓声が爆発して、場内はたちまち沸き立ちます。きらびやかなメロディーに乗って颯爽とステージに現れたのは、とても小さな女の子たちでした。

小さい！ 小さい！ まるでわたしたちみたい！ この大きな夜の底の、そこだけ明るいステージに立った四人はまったく豆粒同然でした。

なのに、大音量の音楽に乗って、その子たちが歌いだしたら、どうでしょう！ 場内を埋めたヒト、ヒト、ヒトが一人残らず飛びあがって、天が地に、地が天に入れ替わるほどの盛りあがりよう。彼女たちが小さな体を大きく動かして、甲高い声を振り絞るたびに、満場のお客さんは、ヒーッ！ エリーッ！ と名前を連呼し、跳ねることをおぼえたばかりの子ウサギみたいにピョンコピョンコ跳ねまわります。

彼女たちは抑えきれない魂について歌っていました。自分たちがいつでも一つであることを誓いあい、明日も輝きたいと願っていました。そして、海の果て、空の彼方で、いつかまた必ず巡りあいましょうと約束し、たがいの手と手を取るのです。お鍋はぐつぐつ煮えたぎり、熱く大きく膨れあがります。満面の笑みと感激の涙。そのすべてを包みこむのはただ喜び。いったいなんという光景でしょう！ こんなに多くのヒトたちが同じ喜びを分かちあい、一つに結びついているのです。そして、それを成し遂げたのがだれでしょう。豆粒のような女の子たち、わたしたちと変わらないくらい小さな女の子たちなんです！

目もくらむほど高い手摺に立って、わたしたちは呆然としていました。心は感動に打ち震え、目からはとめどなく涙がこぼれ落ちます。わたしたちは涙を流しません。大切な水分を失うような、そんなもったいないことはしません。それでも涙を抑えることは不可能でした。こんなすばらしいものはこれまでお目にかかったことがない。カムイ！ 思わず叫んでいました。「カムイ！ カムイ！」

カムイ！

カムイ！

「カムイ？」だれかが問い返した。「それって神様のことだろう？ アイヌのヒトたちの神様だ」

「カムイ」カユプケがていねいに言い直す。アクセントは「カ」ではなくて「ム」のほうにあるのだ。「アイヌでないものがカムイなんです。ヒトじゃなくて道具でもないもの。クマさん、キツネさん、山さん、川さん、火のおばあさん。ヒトができないものができるもの、かなわないもの、恐ろしいもの、それがみんなカムイ」

「感激して思わず出たの」とノンノ。「そしたら、みんなで、カムイ！ カムイ！ 盛りがって止まらなくなって」

「それはあれか。今どきの若者が『神！』『神！』言うのと同じなのか？」と、今どきの若者でない者が言う。「すごい野郎だというんで神！ 超絶技巧なプレーを神！ 最高にいかした曲を神！ 神曲なんて、最初はどこのダンテかと思ったよ。いったいどれだけの神様がいるのかと

」

「わたしたちの世代にはない使い方ですよ」三十代も後半の女性が言う。「神っていうと、どうしても権力者、支配者、傲岸なイメージが強くて、それでなにかを褒めようなんて思わないもの」

「ニホンはもともと八百万の神ですよ」さらに年長の男性が言う。「うなるほどいるし、どこにでもいる。それがもともとのカミなんだ。だから、アイヌのヒトたちと根っこのところでは通じているのかもしれないね。カミの意識に関しては若い世代は先祖返りしてるのかも」

「SPADEだ！ きみたちが見たのはSPADEだね？」一人が話を元に戻す。SPADE。それは人気絶頂のうちに解散した、歌って踊る伝説の四人組アイドル・グループのことだった。「四都市六公演のドーム・ツアー、解散前の最後のツアー、延べ二十万人を動員した愛と感動と号泣のツアー！ その一つを見たんだね？ トーキョー・ドーム？ そうか、SPADEがきみたちの原点だったか！ 合点だ！ でも、小さいってのは、なんて言うか、えーと、遠くから見ただよね？」

「あのヒトたちはわたしたちと変わらない小さな体で大きな波を起こしていました」アチャポがまぶしそうな顔で言う。「力いっぱい歌って踊って、世界をきらきら輝かせていた。わたしたちも彼女みたいになりたいと思った。『カムイ！』って叫んでもらえるような、すごいヒトになりたいと思ったんです」

3 「おまじないパルンペ」

わたしはカムイたちの郷であるカムイモシリに住んでいる、だれにも知られないカムイでありました。

わたしが知られていないというのは、わたしのまわりにいるカムイがみな、すばらしいカムイたちばかりだったからです。どんなに遠く離れても全身が見えないほど大きなカムイ、まぶしく光り輝いて正面から見ることでできないカムイ、六つの山を越えて美しい声を響かせるカムイ、そんな並外れた力を持つカムイたちに比べれば、わたしなどなにほどのものでもありません。ちっぽけでみすばらしくて、取り柄一つないのです。気づいてもらえないのも無理はない。「こんにちは！」と挨拶しても、だれにもわたしの声は聞こえなかったし、「お友達になってください！」と跳ねまわっても、だれにもわたしの姿は見えないのです。

そんなカムイのみなさんがあるとき額を突きあわせて、なにやら話しこんでいました。それがあまりにも楽しそうだったので、わたしは呼ばれてもいないのに首を突っこんでみました。

みなさんが食い入るように見つめているのは巨大な泥の塊です。それはみるみるうちに水と土に分かれ、土は地に、水は海にと変わります。そして、その上に広がるは青い空。「いいぞいいぞ！」「うまいいったな！」「お見事だ！」みなさんはいつになく興奮しています。

「なんですか、あれは？」わたしは驚いて尋ねました。「あのクソみたいだったドロドロがあんなにきれいに分かれるなんて！　ねえ、なにが始まるんです？」

もちろん、わたしの声などだれの耳にも届かないので、返事が返ってくるはずもありません。それでも大まかなところは会話のはしばしから知ることができました。この偉いカムイのみなさんはカムイモシリの片隅にほったかされていた泥塊を使って、そこに新しい郷を築くつもりなのです。

「来たぞ！」「待ってました！」「始まるか！」

激しく波立つ海に降り立ったのは、並みいるカムイたちの中でもとりわけ大きなカムイでした。海の一番深いところに立っても膝が濡れることはなかったし、爪立ちすればその頭は空の雲を突き抜けました。のちにコタンカラカムイ（コタンを作るカムイ）と呼ばれるようになるそのカムイは、おもむろに作業に取りかかります。ぬかるんだ泥を踏みつけては大地をならし、泥を積みあげては山を築く。五本の指で地面を引っかけば、それは並行して流れる幾筋もの川となり、うっかり尻餅をついたところは広々とした湖となりました。

「すごいすごいな！」「わくわくしてきた！」「どんどん行け！」

みなさんは拍手喝采を繰り返し、興奮を抑えきれなくなったのか、新しく生まれつつある大地にしきりになにかを投げ入れます。丸い団子と見えるそれは、カムイのみなさんの体の一部にほかなりません。声援を送るだけでは飽き足らず、自身の体をちぎって丸めて、それをはなむけとしたのです。その祝いの玉たちは、空いっぱい広がって、たがいにはぶつかりあって砕け散り、おびただしい破片となって地に降り注ぎました。そのあるものは虫となって空を飛び、あるものは魚となって水の中を泳ぎ、またあるものは種子となって地面に飛びこみました。温かい雨を浴びた種子は、すみやかに芽を吹き根を張り枝葉を伸ばし、大地を一面覆い尽くします。

「目印になるような山がいるな！」「鏡みたいに静かな湖がほしい！」「かつこよく切り立った崖を作ってくれよ！」みなさんはコタンカラカムイにさまざまな要望を出します。

「ぴよんぴよんできる岩場がほしいです！」わたしも自分の希望を述べました。「遠くを見渡せる小高い丘、丸まって眠れる暗い穴、噛みごたえのある獲物がほしいです！」

けれど、わたしの声はやはり空を切るばかり。

「わたしを伝令に使ってください！」それでも懲りずに叫びます。「一番足が速いわけじゃありませんが、息もしないで走ります！ 一番声が大きいわけじゃありませんが、喉がつぶれても叫びます！ そちらでお手伝いもします！ 屑拾いでも便所掃除でもなんでもします！ ああ、なにかさせてください！ もう我慢できません！」

地上にはすでにいくたりかのカムイが降り立って、コタンカラカムイを手伝っていました。コタンカラカムイの妻であるイカツカラカムイは、繊細な指使いで、白く糸を引く滝やなだらかな山の稜線、高く噴きあがる温泉を作りましたし、のちにレイエブカムイと呼ばれるようになるカムイは、たくましい四本の足で大地を西に東に駆けずりまわり、コタンカラカムイの片腕として大活躍でした。のちにコタンコロカムイと呼ばれるようになるカムイは、大きな翼でがっしりと空をつかみ、だれよりも大きな目で大地のいたるところに目を光らせるのでした。

「ああ、もう我慢できない！」気持ちを抑えきれないのは、ほかのカムイのみなさんも同様でした。「おれも降りるぞ！」「わたしも行く！」「一刻も早くあの美しい大地を駆けまわりたい！」

そして、一斉に体を広げて飛びあがったのです。

「わたしも！ わたしも！ 連れていってください！」一緒に飛び立とうとしましたが、わたしには風をたたく翼もたくましい脚力もありません。そばにいたカムイの尻尾にしがみついて、かろうじて流れに乗ることができました。

星と雲と霞のつらなる六重の空を貫いて、地上に舞い降りたわたしたちを出迎えたのは、潤いに満ちた静かな大地（モシリ）でした。青い山並みに縁取られた緑したたる平原には、川底が見えるほど澄みきった川がゆったりと流れ、小鳥たちは鮮やかな声で楽しくさえずり交わしています。なんと美しい！ なんと豊かな！ わたしたちの口からは賛嘆の言葉しか出てきません。ここはなんというすばらしい郷なのか。

わたしたちは思い思いの姿で地上に居着くことによって、わたしたちの賞賛を形にしました。見目麗しいチキサニカムイはすくすく伸びあがるハルニレの木に姿を変え、あらゆるものに温もりを与えるアペフチカムイは燃えあがる炎に姿を変えました。とりわけ険しい山上に腰を据えたカムイは、のちにヌプリコロカムイと呼ばれ、黒く力強いヒグマの姿をとり、川を心地よさげに漂うカムイは、のちにワツカウシカムイと呼ばれ、なめらかにくねるハリガネムシの姿をとりました。海を駆けるシャチはレプンカムイ、草原を跳ねるウサギはイセポカムイ、せせらぎで狩りをするカケスはハシナウウクカムイ等々、数えあげたらきりがありません。およそこの地上に存在する、ありとあらゆる鳥獣草木山川風物に、カムイはおのれを宿したのです。

わたしはどこに落ち着こうかと悩んでいました。地上に降りる際、わたしがしがみついたチロンヌプカムイは、足の軽いキツネとなって野山を駆けめぐっていましたが、わたしとしてはも

っとちんまりした場所がいいのです。

「おいチロンヌプ。尻尾になにをくっつけてる？」そう話しかけてきたのは、低い空を飛ぶカラスになったパシクルカムイでした。「子供か？ おまえは子供を連れてきたのか？ ほほえましいな！」

「そうです」わたしはとっさに答えました。「このきれいなモシリが見たくて、お父さんに連れてきてもらいました」

「子供だと？」チロンヌプは鋭く後ろを振り返って、尻尾にへばりついているわたしをにらみつけます。「なんだ、こいつは？ こんなやつ知らん。どこも似てないぞ。胴長短足。丸顔丸耳。第一、色が白すぎるじゃないか。なんでこんなに白いんだ？」

「それは雪（ウパシ）が降るからでしょう」わたしは空を見上げて言いつくろいます。「白い雪が降れば、わたしは白くなるんです。ほらほら、レイエプも来ましたよ。うれしそうに尻尾振って庭駆けまわっています。わたしも行こつと！ ミクミクミク！ 追いかけてこみましょうよ！」

わたしはレイエプカムイの前に飛び出して、しばらく後を追わせてから、すいと脇にそれました。面倒なことはごめんなので、とつとと退散したのです。たまたま駆けこんだ岩場が思いがけなく居心地のいい場所だったので、そこに身を落ちつけることにしました。

たがいに競いあって降ってくる雪を穴の底から見上げながら、なにもかも美しいこのモシリに、しかし、なにかが決定的に欠けているような気がしてなりませんでした。ここはわたしたちカムイによって文句なしに楽しい場所です。レイエプカムイに限らず、尻尾振って駆けずりまわりたい庭です。そうです。あくまでも庭なのであって、わたしたちの本来の居場所は天上のカムイモシリにある。では、ここは？ だれがいったいここを自分の居場所と呼べるのか？

「ここはこうやって、ここはこう！」「いやいや、ここはこうしたほうが！」「待て待て、ここはむしろこうだろ？」

雪はいつの間にか止んでいて、静まり返った地平のむこうでは、偉いカムイのみなさんがまた額を突きあわせていました。土くれ、木切れ、石ころ、葉っぱをいじりまわして、なにやらこしらえているのです。

「なんですか？ なにを作ってるんですか？」隠れていることも忘れて、わたしは駆け寄っていきました。「泥んこ遊びですか？ 工作ですか？ いいですね！ わたしも混ぜっいいですか？ なにを作ればいいんです？ わたしにもやらせてくださいよ！」

作っていたのはアイヌ（ヒト）でした。カムイによって開拓されたこの新しい大地の住人として、まったく新しい生き物を作ろうとみんなで話し合っ決めてたのです。どんな材料を使えばいいか、どんな姿形がふさわしいか、あれこれ模索している最中でした。

「これでどうだ！」「なんだそりゃ！」「たまげたな！」

とあるカムイが得意気に差し出したのは、二本足で直立する、毛のない剥きだしの生き物でした。角張ったものと柔らかいものの二種類があって、それは明らかにコタンカラカムイとその妻イカツカラカムイの似姿です。とてもよく似ていました。

「なにを勝手な真似してる」と、コタンカラカムイは最初お冠でしたが、イカツカラカムイ

が「よくできてるじゃありませんか」と同意を求めると、「それは認めなくちゃいけないな」と満更でもない様子です。「もちろん、わが妻の美しさには及ぶべくもないが」と言いいつも、上から下から眺めて飽きることがありません。「目に浮かぶようですよ」イカツカラカムイが目を輝かせます。「このアイヌが地に満ちて、山に川に海に行き交うさまが。おいしいものをたらふく食べて、にぎやかに歌い踊るさまが。夜には焚き火を囲んで、楽しいお話に聞き入るさまが」うむ！ コタンカラカムイが重々しくうなずくと、それで決まりでした。このモシリを手ずから作りあげた創造主夫妻の似姿であるアイヌ。それは、このモシリの最高の功労者に対する、最高の敬意の表明なのです。

一同は諸手を上げて、この新しい生き物を歓迎しました。

「もっと作ろう！」「作り方を教えろ！」「材料はなにを使うんだ？」

「本体は土くれ。背中にはヤナギの幹を一本通して、頭にはハコベの草を飾りつける」

「石で作ったほうが頑丈じゃないのか？」

「いや、柔軟性に欠ける。一度砕けたらおしまいじゃないか」

「これじゃ寿命は長くないぞ。土は干乾び、ハコベは枯れ、ヤナギは曲がる。いずれは前屈みに地面を這って土に還る運命だ」

「それでいい。このモシリが美しい場所であり続けるためにはそのほうがいいんだ。新しいものが生まれるためには、古いものは死ななくてはならない。だから、これが正解だ。男女が一對揃っているから、それで子供を作ればいい」

「これで行こう！」「とりあえず頭数がほしいな！」「どんどん作るぞ！」

みなさんは手分けしてアイヌ作りに励むことになりました。わたしもその作業に加わりたくて、「わたしにもやらせてください！」「材料をまわしてください！」と頼みこみましたが、やはり当然のように無視されるだけです。しかたなく、地面に散らばったヤナギの切れ端、ハコベのかけらをありったけ拾い集めて、巣穴に持ち帰りました。

材料は泣きたいぐらい限られていて、一人を作るにも足りません。それでもわたしも頭数はほしいと思いました。一人よりは二人がいいし、三人よりも六人がいい。それだけ一人一人に割り当てる分量は減ってしまいますが、それもいたしかたないことです。手持ちはこれしかないのですから。

記憶を頼りになんとか形を整えましたが、さて次はどうすればいいのか。ポン アイヌ（小さいアイヌ）たちも立ったり座ったりしてとまどっています。身につけるものが必要なことはわかりました。イモムシのように剥きだしの体はなんとも弱々しく、これでは雨風にも耐えられないでしょう。食事はミミズ、カエル、ネズミを与えましたが、口に合わないどころか、それらの食材から逆に逃げまわる始末でした。子作りの仕方もわからない。わたしはすっかり途方に暮れてしまいました。このあまりにも頼りない生き物をどう養い育てればいいのか。

手がかりを求めて、カムイたちが集うカムイ ミンタラ（カムイの庭）を訪れると、その麓にはすでにアイヌのコタン（村）ができていました。川に沿って立派なチセ（家）がいくつも並び、きれいな衣装に身を包んだ男女が明るい顔で行き交っています。男は弓矢を作り、女は刺繍をし、子どもたちは転げまわって、いたるところに歌と笑いがあふれていました。畑には作物が

実り、干し棚には魚が並び、食べるものには事欠かないようです。チセの屋根からは白い煙が立ちのぼり、おいしそうな料理の匂いがわたしの潜んでいる藪まで漂ってきました。この新しい生き物はすでにモシリにしっかりと根づいている。このモシリを自分たちのモシリとして、たくましく生きていたのです。

すごい！　すごい！　と感嘆しながら、夢中になってコタンの様子を眺めていると、いきなり後ろから押さえこまれました。振り返ると、そこにはいるのはあのチロンヌプカムイではありませんか。わたしの首根っこを踏んづけているのはその前肢でした。

「お久しぶりです、お父さん」わたしはとっさに挨拶しました。「とんとご無沙汰しておりますが、その後いかがお過ごしですか」

「ふざけるな。おまえはだれの許しを得てここに来た？　こそこそ逃げ隠れしやがって。いったいなにを企んでる？」

「企むなんて」わたしは悲しくなりました。「わたしはただ、このモシリが好きなだけです。みなさんと同じように。わたしはここにいちやいけないんですか？」

うん？　チロンヌプカムイは首をかしげます。そこまでは考えていなかったようです。「ここにいちやいけないかだと？　そんなつまらない質問におれさまが答えると思うか？　みんなのところに連れて行ってやろう。暇なやつが答えてくれるさ」

偉いカムイのみなさんはさすがに寛大でした。「かまわんだろう」「いいんじゃないの？」「拒む理由もない」

「このモシリは今やアイヌのためのアイヌモシリとなったわけだが」シマフクロウの姿を借りたコタンコロカムイが言います。「われわれカムイなくしてアイヌは成り立たない。なにせありとあらゆるものにわれわれは宿っているのだから。と同時に、アイヌの手厚いもてなしはわれわれをたまらなく愉快にする。アイヌとカムイはすでにこのモシリで持ちつ持たれつの間柄にあるのだ。おまえがどんなにちっぽけな存在だとしても、カムイはカムイだ。居場所はあるぞ」

「しかし、こいつは怪しいですよ」チロンヌプカムイはなおわたしに懐疑的です。「こんなやつ、これまでいました？　カムイモシリじゃ見かけなかったし、アイヌモシリで見たのもごく最近のことにすぎない。ずっと前からいたんだとしたら、こそこそ隠れてたってことだ。目敏い諸兄諸姉の目をまんまと逃れて、完全に存在を消していた。なにか特別なおまじないでも知っているに違いない」

「おまじないだと？」とコタンコロカムイ。「こんな、見えるか見えないかのちっちゃな口で、どんなおまじないを唱えられるというんだ？　思うに、これまで見つからなかったのは、おまえと同化していたからじゃないのか？　体毛がキツネ色の夏はおまえの尻尾の表に張りつき、体毛が白い冬はおまえの尻尾の裏に隠れ」

「ますます怪しい！　こいつはスパイじゃないでしょうか？　ニツネカムイどものスパイかも」

ニツネカムイ！　それはこのモシリに生まれ育った悪いカムイのことでした。一瞬たりとも休まずに動き続けるモシリでしたが、そこには淀みも存在しました。日が射しこまず、空気が流れず、水はけが悪く、だれも寄りつかない暗い場所。それらの沼沢、湿地、谷底に凝り固まったもの

がニツネカムイ。求められずして生まれ、だれからも愛されない彼らの心中にはただ憎しみしかありません。生きとし生けるものをおのれの住む泥濘、暗闇、奈落に引きずりこむことしか考えていないのです。

「まさか！」わたしは悲鳴をあげます。心外です。よりによってこのモシリの敵と一緒にされてしまうなんて。

「こんな得体の知れないやつは一刻も早く追放すべきだと思いますね。なにか起こってからじゃ手遅れだ」

「結論を出すのはまだ早い」コタンコロカムイがその場を収めました。「このカムイが悪さを働いたところを一つでも見たか？ もうちょっと話し合おうじゃないか」

一同はうなずきました。全員が納得するまで徹底的にチャランケ（話し合い）をするのがカムイの流儀なのです。

そんな折り、アイヌの一团がぶらりとカムイミンタラを訪ねてきました。畏れかしこまりながら挨拶して、「ご相談したいことがありまして」と言います。枝でこしらえた筥をおもむろに地面に置くと、そこに入っているのはわたしのポンアイヌではありませんか！ 筥の上に居座りながら、落ち着きなく左右をキョロキョロ見回しています。「コタンに突然現われたのです」アイヌの長が語ります。「あっちへこっちへうろちょろして、邪魔で邪魔でしかたがない。言葉もろくに話せないようで、なにをしたいかもわかりません。とりあえず食べ物を与えたらおとなしくなって、全部を筥に集めることができました。これはどういう生き物でしょう？ 仲間ですか？ 食べ物ですか？ どう扱ったらいいのやら」

「こいつの仕業だ！」チロンヌプカムイがわたしをにらみつけて、鋭く指摘します。「おれたちのアイヌ作りを盗み見してやがったんだ！」

「いつの間にこんなものを」みなさんは驚き呆れていました。「意外と抜け目ないやつだな」「だが作りが雑だ。同じ作るならもっとていねいに作れ」「食いもんを探しに行ったんだろ。おまえさんの帰りが遅いから、腹を空かしていたんだよ」「それにしても小さいな！」

「小さくても一所懸命生きてるんです」わたしはカムイ仲間に訴えました。「いいでしょ？ 認めてくださいよ。わたしがこのアイヌモシリにいていいんなら、この子たちもいて構わないはずです」

「おいおい。おまえがいったいいつ、ここにいていいことになったんだ？」チロンヌプカムイが痛いところを突きます。

「ここは祝福されるべき大地であり、われわれはアイヌを作ることによって、その祝福に形を与えた」ヌプリコロカムイはヒグマの顔でとまどっています。「われわれはアイヌに火と水と木を与え、わが身を肉と毛皮として提供する。それに対してアイヌはおいしい手料理とお酒、心震わせる歌と踊り、美しいイナウ（木幣）で感謝を示す。このアイヌモシリはアイヌが命をつないでいくことによって、これからも祝福され続けるだろう。だから、この大地の民がいるだけで十分だ。ほかの民は必要ない」

「それに、どうせ生きのびられやしないさ」ホロケウカムイは険しいオオカミの顔で首を振ります。「こんなにちっぽけで無防備なんだぞ。おれがくしゃみをしただけで、十人二十人は死ん

じまうだろう。ここは美しい土地には違いないが、安全が保証されているわけじゃないんだからな」

「おまけに、われわれペケレカムイ（善いカムイ）ばかりが住んでいるわけでもないし」レイェプカムイが人なつこいイヌの顔でつぶやきます。「ニツネカムイは人目につかないところに潜んで、だれかれとなく陥れようと手ぐすね引いて待っている。われわれの作ったアイヌには、持って生まれた知恵と勇気があり、経験の蓄積もある。ニツネカムイがなにを企もうが、うまく切り抜けてくれるはず。だが、このポンアイヌはどうだ？　あまりにも小さいし弱々しいし、おつむも少々たりないようだ。ニツネカムイの魔の手にとやすくかかってしまうだろうよ」

「そこは逆に考えましょうよ。小さいからこそ大丈夫だって」わたしは必死に言い募ります。「どんなところだって生きられるんです。ほら！」

わたしはポンアイヌが入った箆をコロコニ（落）の下に運びました。箆からぶちまけられた六の六倍の数の彼らは、しかし、たった一枚のコロコニの葉に全員が隠れてしまいます。

「本当に小さいな！」一同は改めて驚愕しました。「虫けら並みだ！」「コロコニ　ポク　ウン　クル（落の下のもの）！」

「決してアイヌの邪魔はさせません」わたしはここぞとばかりに畳みかけます。「この喜びの郷を讃えることでは、このポンクル（小さいヒト）もポロクル（大きいヒト）に引けをとらないはずです。お願いします。この子たちを認めてください。お願いしますお願いします！」

「いいでしょう」そこで口を開いたのは、炎の衣を身にまとったおばあさん、限りない優しさをたたえたアペフチカムイでした。「みなさん、細かいことは言いつこなしです。仮にもここは新しいモシリ、わたしたちが望んで得たすばらしいモシリではありませんか。堅苦しいことを並べて、せっかくの門出を台無しにするのはやめましょうよ。この小さなヒトたちはたしかに予定になかったものです。ですが、このモシリに生まれたものである以上、なんらかの役割があるに違いありません。万一なかったとしても、それはそれでいいのではないのでしょうか？　生きたいものが生きる、そんなモシリであってもらいたいものだとなわたしは思います。それはこのモシリの豊かさの証でありましょう」

「ただし」と言って、わたしのほうに向き直ります。「雪のように白いウパシ　チロンヌプカムイよ。あなたがきちんと責任を持って、この子たちの面倒を見るんですよ。夏は木の色、冬は雪の色となって、このコロポックルたちを見守るんです」

「イヤイライケレ（ありがとう）！」

「あなたもそれで納得してくださいな、チロンヌプカムイ」

尊敬すべきアペフチカムイの言葉はだれもおいそれとは拒めないはずです。チロンヌプカムイは苦々しげにわたしを見やり、唐突に「パルンペ（舌）！」と叫びました。「こいつ今、舌をペロリと出しやがった！　してやったり、といったふうに！」

「出してません」わたしは抗議します。「言いがかりはやめてください、お父さん」

「父さんじゃねえし！」

「親子喧嘩は家でやれ」みんなは一斉に笑いだし、その場はお開きとなりました。「それにし

でも長いチャランケだったな」「いいかげん腹減ったよ」「ああ、今日もいい天気だ！」

こうして、わたし、ウパシチロンヌプカムイと、わたしの作ったコロポックルは晴れてアイヌモシリに住むことを許されたのでした。

「だから、今いるコロポックルよ。この郷はあなたたちのために作られたものではないのだから、大きなヒトたちの邪魔にならないように慎ましく暮らしなさい」と、オコジョのカムイは語りました。

わたしたちはフラグランズといいます。

どんぐり山しゅっしんの女の子3人ぐみです。

フラグランズは「におい」「かおり」といういみで、これはわたしたち3人のなまえがぜんぶ、「におい」にかんけいしているからです。

うたっておどれるカムイなかしゅをめざします。

どうかおうえんよろしくおねがいします！

その日は朝から雲行きが怪しかった。暗い雲がどんよりと垂れこめて、今にも落ちてきそうだった。雨ではなく雲それ自体が自身の重さに耐えかねて、そびえるビル群の上で崩壊を始めるのだ。ビルとビルの間を滑り落ち、地面を分厚く埋めつくしてしまう。「今日は中止だな。十中八九。降水確率八十だったし。間違いない」空を仰ぎながらつぶやくヤマトはもちろん傘を持っていたし、隣のサガワも同様だった。二人はアキバハラの歩行者天国に立っていた。外堀通りに面した入口が車止めで塞がれた中央通りには、曇天にもかかわらず大勢のヒトが繰り出していた。雨が降ろうが槍が降ろうが、世界有数の電気街からヒトを締め出すことはできないのだ。「でも、あの子たちは来るからね。十中十！ 香水確率百パーだ。間違いない」サガワは鼻息荒く断言した。

もっとも、仮にすでに雨が降っていたとしても、三人には伝えようがなかった。彼女たちは電話を持っていないし、移動中に連絡してくることもない。日曜日はライブをすることを前提に朝早くどんぐり山を出発するのだ。こちらはその気でいなくてはいけない。

雲行きが怪しいのはなにも空ばかりではなかった。あらかじめ下見をしておいた一画に、二人は持参したテーブルを据えたが、さっそくケチがついたのだ。「ちょっと、そこ」とメイド服を着た女性が文句をつけてきた。「邪魔なんですけど。わたしたち、そこでライブやるんで。どいてくれませんか？」

自分たちが先にここに来たことを言っても通じなかった。「わたしたち、いつもここでやるんです」「ここじゃないとダメなんです」「ご主人様もここを目指して来ますから」「わたしが叱られるじゃないですか」「ここに立ってなきゃダメなんですって」「もう、いいかげんにしてください！」

メイド服の女性がもう一人来て、ご主人様、いやファンとおぼしい三人連れの男性が加わると、ヤマトとサガワにはもう分がなかった。「なんでアユタンをいじめるんですか！」「ぼくらがここで盛りあがってるのを見てたんでしょ？」「だからって横取りするのはいけないというか道理にはずれていると思うんですよね」

「はいはい、お呼びでないということで」サガワはヤマトを押しやりながら言う。「そっち行こ、そこそこ。コーンのむこう。何メートルか動くだけだし、みんなもわかってくれるさ」

ヤマトがあっさりと従って、サガワは逆に驚いた。また一悶着起こすのじゃないかと気が気じゃなかったのだ。「喧嘩なんかするか」ヤマトが不機嫌に言う。「アチャと約束したからな」

縞模様のコーンと駐車中の乗用車に挟まれた一画はネコの額よりは広く、十人かそこらの客は余裕で収容することができそうだ。サガワは改めてテーブルを据えて、「どう、これ？」とヤマトに意見を求める。「細長いテーブルを探してたんだ。実際のステージに近い感じの。将来、ホールなんかでやるときのシミュレーションになるからさ。いいね！　まさにフラのためにあるようなステージだよ。見つけたときは『これだっ！』って思ったよ」

「ピッカピカだな。買ったのか？」

「そりゃ、お金があるなら買うだろうよ。なかったら買わないけれど、たまたま財布をのぞいたら、お金があったんだな」

「三人は喜ぶだろうよ」

「いやいや、言わないでくれたまえ、ヤマトくん！　逆に気を使わせちゃうじゃないか。たまたま手に入れたテーブルが、ステージに使えるんじゃないかと閃いて、それで持ってきたって態で行きたい」

「なんだ、こっちだったっけ？」二人のもとへバタバタ駆けてきたのは、とある人気サッカークラブの真っ赤なレプリカ・ユニフォームを着たオダカだった。木製の丸い卓袱台を外輪船のように小脇に抱えている。「移動したのか。いいけどさ。これ見て見て」卓袱台を誇らしげに突き出してきた。「実家の物置にあったんだ。どっかにあるって親父が言うから、家じゅうひっくり返したさ。ガラクタが押しくらまんじゅうしてた奥座敷、埃とくもの巢と黴のむこうに鎮座召しましていたのが、この卓袱台。昭和の激動を生き抜いた、正真正銘のリアル卓袱台でござい！

見つけたときは『これだっ！』って思ったよ。まさにフラのためにあるようなステージだよ」

しかし、路上にはすでにテーブルがある。「なんだ、この細長いやつ。アイロン台かと思ったよ。これじゃすぐに落っこちるだろ」

「落ちないさ。これだけ広げりゃ十分だ」サガワがムツとして言い返す。「おまえさんは知らないだろうが、フラはポリバケツの上でだって踊れるんだ。空間把握が抜群でね。そりゃまあ、器用に踊ったもんさ」

「ポリバケツで踊ったときはあんたもいなかったろ。古参ぶるのはよせよ」

「そもそもなんでそんなの持ってくるんだ？　今日はおれがステージ当番だろが」

「こんないいもん見つけたんだ。持ってこないほうがおかしいじゃないか。当番なんか変えればいい。そこは臨機応変に行こうよ。大切なのはフラのためになにが一番いいかってことだ。だから、これ！　フラは輪になって踊るだろ？　くるくる回って大きくなったり小さくなったり。だから円形のステージこそがふさわしい」

どちらも簡単には譲らなかった。「いくらなんでもボロすぎだろ」「新品ならいいってわけじゃない。ツルツルしてかえって踊りにくそうだ」「そんな昭和の遺物。みんなこぞってひっくり返したがるぞ！」「そっちは滑って転んで大怪我だ！」

「喧嘩はやめて～」と調子外れに口ずさみながら割って入ったのは、年長者のフナカワだった。「あの子たちが来たらどうするんです？　喧嘩しているところを見せたいですか？　ステージはお嬢ちゃんたちに決めてもらいましょうよ。チラシ配りを手伝ってください」

A5サイズの紙束がクリアファイルから取り出された。「ライブ！」「於：中央通りトンキ前

」「11時JUST!」「かわいいコロポックルの女の子たちです」「いっしょに楽しみましょう」と、装飾された文字が踊っている。手渡された一枚を表裏とひっくり返して、「ああ、今日もきれいですね」とヤマトは感嘆する。表はカラーで、ライブの告知のほかに、「F r a g r a n c e」というロゴ、三人の小さな切り抜き写真が添えられていたが、裏は一変して三人の手書きの文章とイラストで埋まっていた。

チラシの製作はフナカワが一手に引き受けていた。提案したのもフナカワだった。「ライブの告知をするんですよ。最低限、場所と日時を伝えて、余った部分は直筆メッセージと行きましょう。好きなことを書いてください。まずは自己紹介あたりから。好きな食べ物、マイブーム、ドジったエピソード、ちょっとしたことでいいんです。あるとないとじゃ大違いですから」

三人は最初、乗り気でなかった。オープン・カフェのテーブルに広げられた白いコピー用紙を前に、陶器人形のように固まってしまった。「あっ、筆記具？」とだれかが気づいた。「書くものがいるね」

「ありますよ」とアチャポは言って、サラニプ（背負い袋）からペンを取り出した。一つはシャープペンシルの芯を紙で包んで糸でくくりつけたもので、一つはボールペンの芯を先端から二センチほどの位置で断ち切ったものだ。「コタンに戻れば羽ペンもあります。インクがかさばるんで、普段は持ち歩かないですが」

「字は書けますよ」聞かれてもいないのにカユプケが言う。「学校で習いました。ひらがなとカタカナ、全部書けます。アイヌ語表記もバッチリです。漢字だっていくつも書けます」では、なんでそんなに浮かない顔なのか？

「この紙、でかすぎ」ノンノが両手を目いっぱい広げる。「全部埋めるのは大仕事です。一苦労どころの話じゃない。五苦労、十苦労ぐらい必要だ。それに、みんなが読めるように書かなきゃでしょ？ 一文字がわたしたちの頭ぐらいの大きさになるよ。それをこの紙いっぱいなんて！」

なるほど。それで怯んでいたのか。「えーと、コピー機ってやつが世の中にあってね、小さいものを簡単に大きくコピーできるんだ」「きみたちが書きやすい大きさに書いてくれればいい。あとは機械におまかせだ」「二十倍三十倍に拡大するから、なるべく濃い字で書いたほうがいいね」

へええっ！ 三人はいたく感銘を受けたようだ。「そんな便利なものがあるなんて、やっぱり都会は違うな。ついでにわたしたちも大きくしてもらおっか？」「いいね！ そっちのほうが早いかも。わたしたちが大きくなれば、大きい字も普通に書けちゃうし」「みんな、どうして変な顔してる？ この二人、冗談言ってるんですよ。だよね？ おもしろくなかったみたいだよ。難しいな」

白い巨大なカンバスに三人は恐る恐る足を踏み入れた。自分たちなりに考えた文章を綴り、書いたり消したりを繰り返した。強調したい箇所を袋文字にしたり、影をつけたり、文字のまわりを星、月、花、笑顔や、蔓草と渦巻きのアイヌ紋様で飾ったりすると、俄然調子があがってきた。必要に応じてイラストを添えたが、彼女たちの文字自体がそもそもイラストじみていた。お日様や山並み、電車、ビル、ファンたち、キャンディ、チョウチョ、スズメのイラストとしっくり

と溶け合っている。未踏の地に放り出されて、最初はあれほど心もとなかった彼女たちは、今やたくさんの親しいものに取り囲まれて、心底寛いでいた。チラシは毎回楽しいものに仕上がった。

わたしのなまえはアチャポといいます。いつもげんきでまえむきです。おしゃべりとフルーツと友だちとウポポ（うた）が大好きです。かみはちょっとチリチリしています。ピンク色のふくをきているので、それを目じるしにしてください。

わたしはカユプケ。ふくはブルー。かみはながくのぼしています。のんびりおさんぽするのがしゅみで、それはいろんなヒトとであえるからです。テントウムシさん、キンポウゲさん、あさつゆさん、まつぼっくりさん。お日さまはいつも笑ってあいさつしてくれます。かぜさんはほっぺをやさしくなでて、いってらっしゃい！とおくってくれます。みんな、気のいいカムイなんです。

ノンノです。ショートのかみと、きみどりの服でやっています。はりきりすぎるのが玉にきずで、しょっちゅう破ってしまいますが、そのたびに「すごいノンノだね」と言われてしまいます。わけがわかりません。（破れるのは服だけですよ）

チラシの隅にはワンポイントで三人の似顔絵を置いた。常日頃からスケッチにふけているネリマの手になるもので、お団子みたいな丸顔にそれぞれ異なる髪型がかぶさり、点の目と小さな口に微妙な違いがある。「おお、かわいい！」「ファンシー！」「と好評だったが、肝心の三人が渋った。「似てないですね」「かわいすぎます」「実物見たら、みんなガッカリだよ」。これはあくまでもデフォルメに過ぎず、実物と違うことなど、みんな百も承知だと言って説得したが、なかなか首を縦に振らない。それではというので、「写實的に描いてもらう？ネリマちゃんは写真画もこなすから」と提案すると、三人は途端にあわてて、このままでいい、これで行ってください、むしろこれをお願いしますと言ってきた。「細かく描かれても困ります！」ということだった。

「F r a g r a n c e」のロゴは、フナカワが本業の広告制作の合間に、既存のフォントを加工する形で仕上げた。フラグランスの三人による直筆がふわふわとしてとらえどころがないので、ロゴはそれとの対比でシャープに構成した。そこへさらに「フラグランス」と小さくルビを添えた。「フレイグランス」ではなく、あくまでも「フラグランス」だった。三人はハッキリとそう発音しているのだから。「そうおぼえてしまったんだろうね」「お国訛りってやつかもね」「一度身についたものはなかなか変えられないからね」と言って、みんな納得していた。かえって味わいがあるというものだ。

「女性陣はまだ来てないんだね」フナカワが口を尖らせる。「ネリマさんは今日は来られないと言ってました。アオノさんはハカタくんと一緒にしょうか。それじゃ、サガワくんに頼みましょうか」

見上げるような巨漢のヤマトも筋肉質で髭面のオダカもチラシ配りにベストな人選とは言えなかった。サガワは上背こそあるものの、コートスタンド並みに細いので、少なくとも威圧感を与えるおそれはない。「ステージの件は保留だからな！」と念を押してサガワが去ると、オダカはさっそく細長テーブルを畳んでしまう。「おいおい」ヤマトが首を振る。「おれは知らないからな」

「こっちよ！」「ホントだ！」オギノとアユタがパンパンに膨らんだトートバッグやらビニール袋やらを抱えて飛びこんできた。「危うく通り過ぎちゃうとこだったよ。変なメイドさんがいっぱいいるんだもの」「だれか誘導してくれるヒトがいないと困るよ。ここでやるのね？　これがステージ？」

かき傷が走る年代物の卓袱台を一瞥して、二人はあからさまに失望の色を浮かべたが、路肩に寄せられたテーブルを見つけるや、「これでいいじゃないの！」と飛びついた。卓袱台をひっくり返したその手で細長テーブルの脚を立てると、さっそく飾りつけにかかる。「これ、新品よ。買ったのかしら。入れこんでるね。ツツルツル。スケートリンクみたい」「それ、いいね。スケートリンク。雪景色に囲まれた戸外のスケートリンクってイメージでどうだろ？　天気が悪いんだから、せめてステージくらいは華やかにしないと」

トートバッグやビニール袋から、さまざまな種類の布切れ、色付きの針金、綿のかたまり、プラスチックの人形、髪飾り、香水の小瓶、輪ゴムを取り出して、わいわい言いながらテーブルいっぱいに広げる。オダカは抗議しようとするが、口をはさむ隙は一ミリもない。ヤマトはニヤニヤして、「知らないよ」といった顔だ。

テーブルはじきにお伽の国と化した。白いふんわりした綿が降り積もった雪となってテーブルを縁取り、色とりどりの豆電球が明滅する中、ログハウスや白い教会、モミの木、トナカイ、ウサギ、雪だるま、子供たちがにぎやかにひしめいている。わあっ！　オギノとアユタは歓声をあげた。「いいじゃないの」「かわいくできた」

「あきれた」二人の間からオカッパ頭をのぞかせたのは、小学生のソノミだった。「何度言えばわかるんだろ。余計なことばかりして」そう言って、せっかくの飾りつけを次から次と剥ぎ取っていく。「いらない」「これもいらない」「邪魔」「不要」「ゴミ」。路面にはたちまちゴミの山が築かれた。「これじゃ、フラちゃん踊れないじゃないの。オギちゃん、アユちゃん、なに考えてんの！」

ソノミの言うとおりだった。フラグランズの三人はレゴ・ブロックの壁と激突して失神したことがあったし、絡みあうコードに足を取られて転倒したこともある。口の狭いスパイス瓶に落ちて出られなくなったときは、さすがにみんな焦ったものだ。「でもね、ソノミちゃん。なにも全部片付けなくても」「ちょっとぐらいは残そうよ。かわいいステージのほうがあの子たちも喜ぶし」オギノとアユタは説得を試みるが、ソノミには通じない。「みんなはフラちゃんを見に来るの。フラちゃんの歌と踊りが見たいの。だから余計なものはいらないの！」

「正論！」オダカはポンと手を打って、すかさず卓袱台を差し出した。「そして、ステージの正論はこれだ！　ソノミちゃん、これと取り替えよう。そいつはどうも滑るらしいんだ。怪我でもしたらコトだからね」

ソノミはかたわらに立つ母親から薄いコルクシートを受け取って、「これ！」と叫んだ。「これ使えば大丈夫だよ。テーブルに貼りつけるの。そしたらもう滑らないよ」

ソノミちゃんの圧勝！

「いつもこの子がお世話になっております」ソノミの母親が頭を下げる。「パパに似て一度言いだしたら聞かない子でして、ご迷惑をかけていなければよろしいんですが」

「迷惑なんてとんでもない。ソノミちゃんはみんなのアイドルですし」オギノが答える。ソノミの母親とオギノは同年代だった。「自分の娘のように思ってますよ。とは言え、ソノミちゃん、すごいしっかりしてますからね。わたしたちのほうが逆に娘っ子扱いです。そしたら、あなたはおばあさんでしょうか？」

「えーと、それはどういう意味でしょう？ どうもユニークな方たちばかりで、正直とまどっています。ソノミには、その、早すぎるんじゃないかと。早すぎるというか、違いすぎるというか」

「フラはまだ来てないよねえ?！」そこへ大声で割りこんできたのは、頭にごついヘッドフォンを装着したオクタだった。「来ちゃいないとは思ったけどさ！ もしかして行き違い？ かもって思って！ えっ、なに？ ヘッドフォン！ 失敬失敬！ ややっ、そこにおわすはわれらがソノミ姫ではありませんか！ 今日もポヨポヨしてますねえ！ おおっと、鉄壁のガードが入ったあ！ あっ、どーもすいません、お母さん」

駅周辺は往来が激しいので、だれかが付き添う必要があった。フラの三人はあくまでも自分たちの足でライブ会場に行くつもりでいたが、そんな危険なことをさせるわけにはいかないからだ。日曜日のたびに交代でフラを出迎えに行く。改札口で三人を拾って、ポケットに入れるなり肩に載せるなりしてライブ会場まで運んでくるのだ。

「駅にはスミコさんがいます」オクタが一般人モードで話しだす。「改札で出くわして、自分が待つって言うんで、交代してもらったんですよ。もう来ちゃってるんじゃないか、迷っちゃってんじゃないかと。ちょっと遅すぎじゃないですか？ あと十分かそこらで始めなきゃでしょ？」

空もこんなだし、もういつ降ったっておかしくない」

「たしかに遅い」ヤマトは灰色の空を眺めて眉をひそめる。フラグランズはいつも遅いのだ。待つ身にはいつも遅いのだ。しかし、ヤマトが口にしたのは別のことだ。「どんぐり山は今日も遠いんだろうな」

コロポックルたちの故郷である「どんぐり山」がどこにあるかはだれも知らなかった。フラグランズの三人はその場所を決して明かさなかったのだ。「悪いですけど、教えられません。遊びに来られたら、わたしたち、みんな踏みつぶされて全滅ですから」「わたしたちにとっちゃ山奥ですが、みなさんにとっては庭先かもしれませんね」「でも内緒。ちょっとくらい謎めいていたほうが楽しいでしょ？」

ただ、首都の西側にあることは確かだったし、電車を乗り継いで二時間ほどかかることもわかっていた。その道程が相当厳しいものであることも想像に難くない。どんぐり山が本当に山奥にあるとしたら、駅に辿り着くまでがまず一苦労だろう。駅の構内が大変なことは言うまでもない。階段の踏段一つは優に背丈の三倍はあるし、巨大な靴が行き交うホームを踏破するのは命がけ

に近いだろう。ホームと電車の間はときに三十センチもの裂け目が走り、普段は難なく飛べるはずの距離でも思わず足がすくむというもの。乗車してからも快適な時間をすごせるわけがない。ぼくらにとってはほどよく心地よい揺れが、彼女たちにとっては時化の海なみの荒れ模様だろう。

「でも、この前、ジェイアルさんと相談して、車掌室に特等席を作ってもらいましたよ。スポンジに穴をくり抜いて窓にくっつけてくれたんです」「もう仲良しですよ。おはようございます、よろしく願いですって挨拶して、むこうもニコニコ敬礼して」「運転士さんが居眠りしたら、ちゃんと起こしてあげたりしてね。ん？ これ言っちゃダメなんだっけ？」

それでもライブ会場までの道程が鼻歌まじりのわけはない。これまではたしかになにもなかった。しかし、それは今後もなにもないという保証とはなりえないのだ。「おれが行こう」とつぶやいて、今度はヤマトが駅にむかった。

「こんにちは」「ちーっす！」「遅れた遅れた」と言って、ビデオカメラを持った大学生のオオゼキ、威勢のいいロック青年のアゲオ、音楽ライターのハカタ、その連れであるアオノが続々とやってくる中に、見慣れない顔が混ざっていた。黒縁の眼鏡をかけた、高校生くらいの学生服男子だ。フナカワ作成のチラシを見せて、「コロポックルはこちらですか？」と気弱そうに尋ねてくる。「そっちのメイドのヒトたちですし、さすがに違うと思いまして。生きている本物のコロポックルですか？ コスプレじゃなくて？ フィギュアでもなくて？」

いらっしやい!!! 一同は新参加者を熱烈に歓迎した。「よく来た！ 来てくれた！」「もうすぐ始まりますからね！」「ちっちゃいけど、あんまり驚かないように。むこうが逆に驚いちゃうし」「高校生？ ここにはよく来るの？ 中古のマックを買いに？ ああ、ぼくのやつ譲ろっかな！」「いつもはどんな音楽聴いてるの？ 曲はね、普通の歌謡曲だけど、踊りがちょっとユニークでね」「まあ、気楽に楽しんでってよ。もう来るからね。来るはずだけだな」

「えっ、まだ来ない？」チラシ配りから戻ったフナカワとサガワが顔を見合わせる。「電車、遅れてるんでしょうか。駅に電話かけてみますか」「あわててもしょうがない。待ちましょう。ぼくらには待つことしかできないんですから」

女性の金切り声が聞こえたのは、駅もほど近いあたりだった。公共の場には似つかわしくないヒステリックな感情の爆発で、ヤマトも関わり合いになるのはごめんだった。足早に通り過ぎようとしてチラリと横目でうかがうと、そこにいるのは、なんとスミコではないか。黒いサングラスをかけた背の高い男に猛然と食ってかかっている。だから！ あなたは！ なにをしたと思ってんですか！ ヤマトはあわてて駆け寄った。「スミコさん、どうしました？」

ハイイ！ 不意に甲高い声がして、その方角に目を落とすと、フラグランズの三人が銀色の歩道杭のてっぺんに座っていた。「奇遇ですね。ヤマトさんじゃありませんか」「おや、この大きな方があのヤマトさん？」「正真正銘、本物のヤマトさんですよ！」

「わあ、本物のコロポックルだ！」ヤマトは大げさに驚いてみせるが、そうしないと三人が承知しないからだ。バツの悪さはK点越え級だった。ごつい三十男が人前でやることではないのだ。

「このヒトがタバコを！」スミコがヤマトに訴えてきた。「この子たちにタバコを！」

道路の中央でたまたま往来が途切れたとき、メンバーの一人がその大通りをじかに歩きたいと

言いだしたらしい。初めて訪れた場所でもなかろうに、ちょっとした気まぐれなのかもしれない、スミコは希望を聞き入れた。右や左を仰ぎ見ながら、「大都会！」「お空に届きそう！」とはしゃぐさまは、まさにおのぼりさんだった。

そこへいきなり前を横切った男がいて、その際、手に持ったタバコを道端に弾いたのだ。煙を棚引かせながら飛んできたタバコには赤々と火が灯っていた。三人は難なく避けることができたが、スミコは心臓が止まるような思いだった。普段はいるのかいないのかわからないような女性だったが、タバコを捨てた男性に猛然と食ってかかった。「あなた、なにをするんですか！」「なにかあったらどうするんです！」「火傷を！ 火傷を！」「許しませんよ、絶対に！」

「いやちょっと」「わざとじゃなくて」男はどうしてこんなに責められるのかわからないようだった。「すいません！」「もうタバコやめます！」と叫んで、ほうほうの態で逃げ去った。

「すごいな、スミコさん」ヤマトはほとんど感動していた。ろうそく並みにおとなしいこの女性でさえ、フラのためとあらば烈火のごとく燃えあがるのだ！「急ぎましょう。みんな、首を長くして待ってますよ！」

「急ぎません」と、しかしスミコは頑固に言って、籐のバスケットを道路に置いた。「安全第一です。ゆっくり行きます。さあ入って」

そして、バスケットを宝物のように胸元に抱えて、しずしずと歩きだしたものだから、ヤマトはスミコごと担ぎあげてしまいたくなった。

間に合ったあ！ と叫びながら、地面に降ろされたバスケットから、ピンク、青、黄緑の三つの玉が飛び出した。フラの三人は移動中のバスケットの中で着替えを済ませていたのだ。それぞれ色の異なる同じ型のワンピースだった。「待たせました？ ごめんなさい。電車を一本乗りそびれちゃって、接続も悪くて」「スミコちゃん、すごかったですよ。サングラス男をKOです。みんなも見ればよかったのに！」「わあ、お客さんがいっぱいだあ！」

縞のコーンと乗用車に挟まれた一画には、客が十人以上もひしめいていた。おなじみの顔が並ぶ中に一人、知らない顔が混ざっている。学級委員長みたいに真面目くさった顔をした高校生だ。フラのほうに身をかがめてなにやら口をパクパクさせると、三人は途端に破顔した。「イランカラプテ！」「おにいさん、アイヌイタク話せるの？」「アイヌのヒト？」。高校生は「イランカラプテ」、つまり「こんにちは」と挨拶したのだ。

「アイヌではないです」高校生はあわてて否定する。「つまりその、民族としてのアイヌではないという意味で、ヒトはヒトですよ。見ての通り。最近アイヌ語に興味を持ちまして、習いはじめたばかりなんです。コロポックルと聞いて、ひょっとしてアイヌ語話すのかなと思いまして」

「それはおあいにくですね。普段は全然ニホン語です。こっち来て長いですし」「たまにポンノ出てくるけどね。タネちょっと出してみたよ！」「お話ししましょう。えーと、暇なときに」

雨粒がぽつりぽつり落ちはじめた。まだ傘をさすまでもない程度だったが、心配しなくてはならないのはあくまでも三人のことだ。雨粒一滴はぼくらにとってのバケツ一杯に等しいのだ。雨があがったら風も出る。うちわ程度の風でも彼女たちは軽く吹き飛ばされてしまう。大事をとってヤマトはステージの上に傘を掲げた。いつでも交代できるよう、サガワもそばに控えた。風が

吹けば、三人四人が風上に防風壁として立つはずだった。

「それじゃ始めます」とアチャポが宣言した途端に、しかし雨は強雨と変わった。あちらこちらから悲鳴があがり、色とりどりの傘が花開く。その合間を通行人が右往左往して、歩行者天国にはわかに騒然となった。「降りやがった！」「どうする？ 続けられる？」「いったん雨宿りしたほうが」

稲妻が炸裂し、雷鳴がとどろくと、雨は本格的な土砂降りと化した。「ダメだこりゃ！」「中止だ！」「撤収！」と一同があわてふためく中で、思いがけない事態が出来た。ピンク、青、黄緑の玉がいきなり路上に飛び出したのだ。雨がはじけるアスファルトの上で、クポロ！ クポロ！ 叫んでジャンプし始めた。なんだこれは？ にわかには信じがたい光景だった。普段は神経質までに雨を避ける彼女たちが、よりによって自らその只中へ飛びこむとは。しかも、そのはしゃぎぶりときたら。右に左にやみくもに跳ねて、転んでもすぐに起きあがっては再び跳躍を繰り返す。一同はずぶ濡れになりながらなんとか三人の身柄を確保することに成功したが、彼女たちの興奮は収まらず、両手で作ったシェルターの内部でなおも「クポロ！」「クポロ！」騒いでいた。だから、それはなんなのだ？ 「知らないんですか？」ノンノが不思議そうに言う。「雷と一緒に降る雨は体を丈夫にするんです。だから、わたしたち、『大きくなるぞ』って言ってたんです。みんなもそうしてたんじゃないの？」

ひとまず近くの喫茶店に避難した。三人を保護するために駆けずりまわったオダカが一番の濡れ鼠で、自慢のワラウレッズのユニフォームを完全に絞り切らないと入店を許可してもらえなかった。「どうもごめんなさいです！」われを取り戻したアチャポが何度も頭を下げる。「わたしたちのためにいつも苦勞がいっぱい」

「とーんでもない！」オダカはいたって爽やかに答える。「気にする必要まったくなし！ ぼくらは言うなればサポーターなのさ。ファンなんて生ぬるいもんじゃない。もっと積極的に関わってる。自身の掛け替えのない一部として、熱烈に支え応援する。だから、こんなのは苦勞のうちに入らないよ。間違いない。ぼくらはサポだ。サポなんだ。オレーッ！」

オダカは熱心なサッカー狂なのだ。拳を握りしめての熱弁には一同も納得だった。「なるほど、サポね」「わかるわかる」「そうかも」

一方、フラグランズの三人はくすくす忍び笑いをしている。なにかと尋ねるが、「なんでもない」「悪いから」「笑ってないよ」と言って教えてくれない。

「あのう、『サポ』っていうのはアイヌ語で『お姉さん』の意味でして」発言したのは先のアイヌ語高校生だった。「どちらかと言えばマッチョなあなたが、胸張って『お姉さんです！』って主張するんで、彼女たち、おかしかったんじゃないでしょうか。髭面なのにお姉さんかたって。ああ、ごめんなさい！ 決してバカにするつもりでは」

高校生はキンダイチと名乗った。都内の高校二年生で、クラスでは学級委員長をしているという。

「グループ名のフラグランズ。それって、英語の『フレイグランズ』とアイヌ語の『フラ』をかけてるんですよね？ 『匂い』を意味するアイヌ語の」

「わかってもらえてうれしいです」カユプケがニコリとほほ笑む。「ちょうどロゴがよかつ

たから、フラグランスにしたんです。わかるヒトは少ないでしょうけど、わかったヒトがクスリとしてくれればいいかなって」

語呂がいいということらしい。

「あ、でも、ぼく、本で読んだことしか知らないです。ごくごく浅い知識でして」

「サポがお姉さんなら、お兄さんはなんてんだよ」オダカが尋ねる。

「ユポ！」フラの三人と高校生は同時に答えて、顔を見合わせて吹きだした。

「それじゃ」フナカワが口をはさむ。「ぼくらの中にはお姉さんもいればお兄さんもいる。つまりぼくらはサポユポですね」

「わたしもお姉さん？」小学生のソノミが首をかしげる。「フラちゃんたち、わたしより年上じゃないの？ 何歳なの？」

「何歳でも」とアチャポ。「わたしたちのためになにかしてくれるヒトはみんな、お姉さんでありお兄さんですよ。ソノミ・サポ。フナカワ・ユポ。そう呼ばせてもらおうかな。感謝しています。イヤイライケレ！」

雨が上がった。

「日が出たぞ！」「再開する？」「もちろん、これからが本番だ」「サポユポ出動！」
フラグランスとそのサポユポは雨上がりの路上に飛び出した。

フラグランスです。

わたしたちは今とてもじゅうじつしています。

ゆめにむかってあゆみはじめたからです。

ゆめといっても夜みるものではありません。

そうしたいというねがいのことです。

(サポユポのヒトにおしえてもらいました)

わたしたちのゆめはS P A D Eさんみたいに

おおぜいのおきやくさんのまえて、うたっておどるかしゅになることです。

大きなかいじょうをそれよりも大きなよろこびでいっぱいにすることです。

このゆめをじつげんするために、わたしたちはなんでもやるつもりです。

まだまだ先はながいですが、3人できょうりよくしあって、くじけず、ひるまず、どりよくしていこうとおもっています。

がんばります！

おうえんしてください！

わたしは、美しいアイヌモシリに憧れてカムイモシリから地上に降り立って、アイヌたちから「アイヌくさい者」という意味でアイヌラックルと呼ばれていたカムイでした。

わたしはアイヌたちに火のおこし方、狩りの仕方、さまざまな道具の作り方、スルク（トリカブト）の扱い方、ヒエの育て方、カムイたちが喜ぶオンカミ（礼拝）の仕方など、知っているかぎりのことを教えました。最初はあんなに頼りなさげだったアイヌたちも今ではすっかりたくましくなり、川筋にコタン（村）をたくさん作って栄えていました。もうわたしの助けなど必要ないと思うのですが、アイヌたちはなにか問題が起こるたびにわたしのチャシ（城）に来るのです。頼りにされることはうれしいことに違いありませんが、これではアイヌはいつまでたっても独り立ちできない。わたしは泣く泣くカムイモシリに戻る決心をいたしました。

けれど、「わたしは帰りたくありませんね」と、チコロ カツケマツ（わたしの妻）は駄々をこねます。「ここは土地もすばらしいし、生き物はみんなのびのびしています。アイヌはわたしたちを慕ってくれて、食べ物はみんなおいしいじゃありませんか。少なくともわたしは離れる理由がありませんね。あなただけ帰ればいいのでは？ わたしはここに残ります」

まさか、そういうわけにはいきません。「わたしがいなくなったら、アイヌはおまえを頼ってくるだろう。だが、おまえにはわたしの知識も知恵もない。それでも、おまえはそれを認めたくなくて、適当なことを言ってごまかしてしまうに違いない。それが最悪の結果を招かないとも限らないんだぞ」

「そうでしょうか？」妻は認めようとしません。「あなたは一人ぼっちで帰って、口さがない連中になにを言われるか心配なだけじゃないですか？ あの野郎、みんなの反対を押しきってアイヌモシリに行ったはいいが、女房に追い出されたみたいだぜ、とか」

「帰り支度を始める！」これは決定事項です。

荷物をまとめはじめても、妻はいつこうに手伝おうとしません。珍しく話しかけてきたかと思えば、「お客さんよ」と言う。だれかと尋ねると、「さあ」と来た。そんな返事があるかと腹を立てましたが、来たものを見て納得しました。それは白い靄でした。濃密に立ちこめた白い靄が背後にいるものを隠している。「なにものか」わたしは問いました。「客としてやって来ながら、なぜ姿を隠しているか？ 無礼ではないか」

「ああ、ごめんなさい。うっかりしてました」靄が晴れると、そこにいたのはみすばらしい色をしたイタチでした。いや違う。これはキツネか？ それともネズミ？ 「わたしですよ。ウパシチロンヌプカムイ。あなたがアイヌモシリに来たときに挨拶したじゃないですか。白くないからわかりませんか？ しょうがないですよ。もう冬じゃありませんから」

「おまえか」このカムイはサチリ（オコジョ）の姿をしているのです。「しばらく顔を見なかったな。すっかり忘れていたじゃないか。どういう風の吹きまわしだ。わたしたちがここを離れることを聞いたのか？ お別れの挨拶に来てくれたか？ それはわざわざご苦労だったな」

「違います。頼みごとがあるんですよ。コロポックルのことで」

コロポックル？ 「ああ、あの小さいやつらか。達者でやってるか？」

ウパシチロンヌプは無言で首を振ります。こいつはなにをを考えているのかわからないような顔をしているのですが、このときばかりにはそこにありありと焦燥の色がうかがえました。

「あの子たちはちっちゃいから、どうにでもなるといったんですよ。木の実と虫と小魚を食べて、細々と生きていけるといったんです。なのに、こんなに増えちゃうなんて！ 一人一人はあんなに小さいのに、もう横になる場所もないくらいなんです。木の根、枯れ葉、臭い虫まで食いつくして、今は土を食らっています。このままではみんな飢え死にです」

「ふむ。それは気の毒だ」おまけのような生き物ではありますが、死なせてしまうのはさすがにかわいそうです。「アイヌのコタンで受け入れてもらえないか頼んでみようか？」

「ヤイライケアシ（ありがたい）！ さすがはアイヌラックル。来た甲斐があったというものです。それじゃ、さっそくみんなに言いますね」

「おい待て。早まるな」

しかし、わたしの言葉など聞かないで、ウパシチロンヌプは外に走り去っていました。やれやれ。「せわしないやつだ。あんなことだから、やつは偉いカムイ、パセカムイ（重いカムイ）とは見なされないんだ」

「アイヌのみんなに早く知らせたほうがいいんじゃないの？」どこか見えない片隅から、妻が口を出してきます。「でないと、あのちっちゃいヒトたち、今にも押しかけていっちゃいますよ」

「こっちは荷作り中だってのに」

わたしはつまらないカムイ、コシネカムイ（軽いカムイ）ではないのだから、どんなときでもあわてないものです。三日かけてゆっくりと右の脚に脛当てをあてて、さあ左の脚に取りかかろうかと思っていた矢先、アイヌコタンから使いの者が駆けこんできました。「アイヌラックル！」息も絶え絶えに叫びます。「これはどういうことですか？」

「おお、コロポックルが来たのかな」わたしは鷹揚に尋ねます。「腹を空かしていただろう？」

まあ、ちょっと面倒を見てやってくれないか。先に許しを得なかったのは悪かったが」

「すると、本当だったんですね？ あなたが許可を与えたというのは？ 『アイヌラックルのお許しだ！』と叫びながら、やつら、雲霞のように押し寄せてきたんです！」

十戸のチセ（家）が集まるそのコタンに、コロポックルたちは六を六回も掛けあわせたほどの数で乗りこんできたというのです。「地面をすっかり覆い尽くして、それがひっきりなしに上下に跳ねる。まるで地面そのものが波打っているようでした。ですが、それは間違っても地震じゃない。地震はあんな耳障りな音を出しませんし」

食いもん！ 腹減った！ ワアアッ！ キイイッ！ と口々に叫びながら、飢えるコロポックルは目につくものに片っ端からかぶりついたのです。干し魚、フキノトウ、ギョウジャニンニクにむしゃぶりつき、蒔いたばかりのヒエやインゲンの種をほじくりかえし、果てはプー（倉庫）に押し入って、大切に蓄えてある干し肉、クリ、ウバユリ団子にまで手をつけました。

争いを好まないとはいえ、アイヌもさすがに黙ってはいません。棒切れや銚を振って追い払おうとしましたが、そんな軽い威嚇でさえこの小さな生き物にとっては命に関わるほどの脅威でした。棒切れは巨大な丸太も同然で、ひと振り食らえば体じゅうの骨が折れてしまうし、銚の刃

先はサメの背びれも同然で、ひと舐めされれば胴体は真っ二つに裂かれてしまいます。

身内を殺されて引き下がるほど、コロポックルもおとなしくはありません。怒り狂って反撃を開始しました。アイヌ一人に対して六の六倍ほどの数が飛びかかって、噛みつき、引っかき、目玉を突つき、鼻の穴や耳の奥に潜りこもうとします。アイヌももう遠慮してはいられない。今度はあからさまな殺意をこめて逆襲をはじめます。かくしてアイヌとコロポックルの間に血で血を洗う戦いが繰り広げられたのです。

「なんだって！」わたしは愕然としました。「今すぐそんな愚かしい真似はやめろ！ コロポックルを皆殺しにするつもりなのか」

「食べるものがなくなれば、死ぬのはわたしたちのほうなんですよ、アイヌラックル！」

「ウパシチロンヌプはどこにいる？ あいつはなにをしてるんだ？」

「あのろくでもないイヌッコロが率先して暴れてるんです。小さいくせして凶暴なやつで、ほんと手を焼いています」

「では、今すぐ戻ってウパシチロンヌプに告げろ。コロポックルを一人残らずこのチャシに連れてこいと。アイヌラックルの命令だと」

傷つき疲弊したおびたしい数のコロポックルは、わたしのチャシへいたる山道を、ナメクジの這うほどの歩みでとぼとぼと登ってきました。

「こんなに大人数だなんておまえは一言も言わなかったじゃないか」一足先にやって来たウパシチロンヌプをわたしはきつくとがめました。

「横になる場所もないって、わたし、しっかり言いましたよ」ウパシチロンヌプは自分が悪いとはちっとも思っていないようです。「正確な数が言えればよかったんですが、わたしは数なんか知りませんし」

「アイヌのものを奪ってはならんのだ。蓄えを心がけているとはいえ、必要以上に貯めこんだりはしないんだから」

「それじゃ、あなたが食べさせてくれるんですか？ 落ち着いて食事できなかったから、まだみんな腹ペコですよ」

「子供がたくさんできたみたいで楽しいわ」チャシの床を埋めつくすコロポックルに妻は最初とまどっていましたが、今では妙にはしゃいでいます。「こんなに扶養家族が増えたんですもの、当分はカムイモシリには帰れませんね」

「冗談じゃない」わたしはあわててました。「こいつらを養うつもりなんか毛頭ないぞ。すぐにでも居場所を見つけてたたき出してやる。とりあえずなにか食わせてやれ。どうせカムイモシリに帰るんだ。なにも残しておくことはないからな」

「はあい」妻ははずむように返事をします。「さ、みんな、こっちにいらっしやい」食いもん！ 腹減った！ ワアアッ！ キイッ！ と叫んで、コロポックルたちはたがいに上になり下になりしながら妻を追いかけていきました。ウパシチロンヌプもそこにちゃっかり混じっています。まだ話は済んでないというのに。

さて、これからどうしよう。窓から外を眺めて思案していると、カッコク、カッコク、と声が出て、見ると目の前で鳥が一羽羽ばたいています。軽やかに節をつけて歌うには、

チコロペツに魚いないよ トウシペツに魚いるよ
トウシペツに魚いないよ チコロペツに魚いるよ

「カッコクカムイ！」わたしは叫びます。カッコウの姿をしたこのカムイは大の情報通なのです。「魚がいるというのか？ どっちにだ？ チコロペツか？ それともトウシペツか？」

「どっちかに！」カッコクカムイはくるりと身を翻すや、カッコク、カッコク、けたたましく鳴きながら飛び去りました。

「どっちかじゃわからないぞ！」しかし、わたしの声は空を切るばかり。「あいつはわたしをおちよくってるのか？ 謎かけばかりで答えがない」

入れ替わるようにしてやってきたのはわが妻でした。「偉いカムイの旦那さま。お望み通り食糧が尽きたですよ」どこかおもしろがるように言うのです。「でも、わたしはこれっぽっちも心配していませんわ。知恵あり知識あるあなたさまはいつでもすばらしい解決策を見つけてくださるんですもの」

「その通りだ。たった今、報告を受けた。チコロペツもしくはトウシペツに魚が出たんだ。マスだろう。残念ながら、どっちの川かはわからない。カッコクくんは肝心なところが抜けているのだ」

「マスですか！」ウパシチロンヌプが歓声をあげます。いつの間にかわたしの足下に立っています。「いいですね。新鮮なマス。乾物ばかりでそろそろ飽きてきたところです。それじゃ、さっそく行きましょう」

「どっちへだ？」わたしは尋ねます。「チコロペツか、それともトウシペツか？ どっちかに魚はいないんだぞ」

しかし、ウパシチロンヌプはすでにチャシを飛び出していました。コロポックルたちもすぐにそれにならって、山道を転げ落ちるように走っていきます。チャシの中はたちまち静まりました。

呆れる一方で、わたしはある種の感動をおぼえました。あれほど頼りにならないカムイもないのに、コロポックルたちは自分たちの造り主を心から慕っているのです。

「どうするんですか？」妻が尋ねてきましたが、どうもこうもありません。片方の川に行っても魚があるなら、それを獲って食べればいいし、もし魚がいなかったら、もう一方の川に行けばいいだけのことです。

「でも、あの子たち、魚を生で食べれるのかしら。ウパシチロンヌプはそれでいいでしょうけど、コロポックルは無理なんじゃ？ 煮炊きすることはできるのかしら。魚をちゃんとさばけるのかしら。干し方を知らなかったら蓄えることもできませんよ。あなた、様子を見てきたらどうです？ それとも、わたしが行きますか？」

「わたしが行くとも。これはわたしの仕事だ」

もちろん、偉いカムイ、パセカムイたるもの、むやみにあわてては沽券に関わるというもの。また三日かけてゆつくりと左の脚に脛当てをあてて、いざ出発しようと思っていた矢先、

再び来客がありました。エヘン！ エヘン！ と咳払いをして戸口から顔をのぞかせたのは、タヌキの姿をした山の番人、モユクカムイでした。「山のてっぺんに立って、右にチコロペツ、左にトウシペツを眺めていたが、アイヌラックルよ、大変なことになっているぞ」

ウパシチロンヌプはまっすぐチコロペツへむかって、そこで運良くマスの大群と遭遇したのだそうです。川幅いっぱいに広がってピチピチ跳ねるマスに、ウパシチロンヌプは果敢に飛びかかりましたが、魚を獲ることはどうやら不得手なようです。盛大に水しぶきをあげるだけで、一向に捕まえることができない。

待ちくたびれたコロポックルたちも造り主にならってマスに挑みかかりますが、これは無謀というほかありませんでした。鋭い爪も尖った牙もない小人が、十倍も大きな魚にどうして太刀打ちできるでしょう。川に入ることで体が誤りでした。コロポックルは泳ぎが得意ではないし、川の流れはいたって急で、たちまち流されてしまいます。運良くマスに辿り着けたとしても、飛びかかるそばから跳ね返される。しまいには自分たちが食べるはずだったマスに逆に食べられてしまう始末でした。

ウパシチロンヌプがなんとか陸揚げできたマスも、コロポックルにとっては難物でした。枯れ木をこすっても石をかり合わせても、どうしても火をおこすことができなかったし、たまりかねてそのままかぶりつくものの、生ではやはり食べることができず、そっくり吐き出してしまいます。それでも、せっかくの獲物をあきらめることができないのか、競いあうようにまた同じことを繰り返すのでした。

一方のトウシペツも混乱の極みにありました。間違ってこちらの川にやって来たコロポックルたちは、いもしないマスを求めてあてどない探索を続けたのです。そもそもマスを知らないらしく、あるいは自分たちよりも小さいのじゃないか、川底にこっそり隠れているのじゃないかと、力を合わせて石をひっくり返し、水中深くまで探しまわりました。。しかし、その努力もむなしく、疲労困憊した末に、力尽きて急流に吞まれたり、カワセミに襲われたり、さんざんな最期を迎えました。

「なんと愚かな」わたしは心底呆れ果てました。「いったいなにを考えてる。いや、なにも考えていないのか。考えることができないのか。やみくもに飛びかかって魚なんか獲れるわけがない。泳げもしないのになぜ川に入るのか。食えないとわかってるのに、なぜ生魚にかぶりつくことをやめない。疲れたなら休めばいいのに、バカの一つおぼえのように同じ失敗を繰り返すばかり」

「なにも教わってないんですよ」モユクが悲しそうに指摘します。「彼らは放置されていたも同然でした。火のおこし方も知らないし、畑の作り方も知らない。目につくものを食べるだけ食べて、あとは寝る、遊ぶ、子作りに励む。ひたすらその繰り返しだったんです」

「そして人口爆発を起こして、与えられた山を丸裸にしまったと、そういうわけか」

「その山がまたポンス山という、文字通り小さなお鍋のような山でしてね。六の六倍の数だったときはまだそれで十分だったんです。アイヌの邪魔をするな、慎ましく暮らせというウパシチロンヌプの言葉に盲目的に従っていたんでしょう。アイヌコタンに行けという、あなたの言葉があるまで、山から出られないと思いこんでいたようです。ポンス山を坊主山にして、あとは共

食いでもするしかないところでした」

言葉ありません。

「一つ提案があるのですが」モユクが続けます。「わたしが住んでいる山の奥にはカルシ（キノコ）が大量にあるんですよ。シイタケ、マイタケ、タモギダケ、エリンギ。アイヌはこんな山奥まで来ませんし、カルシを好む生き物もこのあたりは少ない。ここをコロポックルに提供しようかと」

「カルシか。それはいい」思いがけずすばらしい申し出でした。「煮て食える。焼いて食える。そればかり食うわけにはいかないだろうが、とりあえず腹を満たせるのはありがたい。けれど、量は足りるのか？　いくら小さいとはいえ、六を六回かけあわせたほどもいるんだぞ」

「不謹慎なことを言うようですが、数は激減したようですよ。アイヌコタンの争いと今回の川の惨事で。カルシの山は十分に広く、当座はしのぐことができるでしょう。その間にぼちぼちと、魚を獲ること、煮炊きの仕方、畑の耕し方を教えればいい。それでは、お許しが出たと考えてよろしいですね？　さっそく知らせに戻りますが」

「ウパシチロンヌプにはもう言ったのか？」

「ええ。こちらに来る前に、あなたの承諾を得てくると言い置きましたから」

「なら、急いで戻る必要はないぞ。あいつは勝手に山に入ってるだろう。カルシを採集中さ」モユクカムイが去ったあと、わたしは右の脛と左の脛から脛当てを取りはずす作業に取りかかりました。もう出かける必要はなくなったのですから。

「これで心置きなく荷作りに専念できるというものだ」わたしは聞こえよがしにつぶやきます。「最後の最後に問題を一つ解決できて満足だ」

「本当ですか？」妻は納得がいかないようです。「もう問題はないとおっしゃるので？」

「だろう？　相手はカルシだぞ。銚を振りかざしはしないし、尻尾を振りまわすわけでもない。おとなしくおいしく食べられるだけさ」

「でも、食べられるものと食べられないものがあるんじゃないの？」

わたしははじけたように飛びあがりました。脛当てだのパセカムイの沽券だのはもうどうでもいい。一陣の風と化すや、ただちにカルシの山に駆けつけます。しかし、時すでに遅し。コロポックルたちはただならぬ事態に陥っていました。

彼らが火種と土鍋を手に入れたこと、カルシを煮炊きする術を学んだことは喜ばしいことでした。問題はカルシそのものです。ぐつぐつ煮えたぎる鍋のまわりには、幻惑的な色と形のカルシがうなるほど散らばって、コロポックルたちがその間を七転八倒していました。涙を流しながら大笑いし、髪を掻きむしって泣きわめき、どことも知れぬ方角に目を泳がせてふらついているのです。ゲエゲエとひっきりなしに嘔吐する者もいれば、歯の根も合わないほどガタガタ震えている者がいます。喜怒哀楽をそのすべての方角に向けて全力で振り切ってしまったようで、この世のものとも思えない景色でした。もう一刻の猶予もない。

「やめろ！　食うな！　もう食うんじゃない！」わたしは声を限りと叫びますが、だれも耳を貸しません。ここにはもう正気の者はいないのか。すぐ目の前で、顔青ざめ頬を膨らませながら、なおカルシを口に詰めこもうとする者がいたので、持っているカルシを指先ではじき飛ばすと

、「なにをする！」と怒りだしました。「罰当たりめ！ あの偉いアイヌラックルがわざわざ恵んでくれたんだぞ！ 食べなくちゃ！ 食べなくちゃ！」

「ウパシは？ ウパシチロンヌプはどこにいる？ 川だと？ まだ魚を獲ってるって？ カルシは好みじゃないだって？ くそっ、なんの役にも立たないやつだ！ どうすればいいんだ？」

と、そのときです。一天にわかにかき曇り、夜のごとき暗闇と化すや、いきなり目の前で光が炸裂しました。続いて、湖の底が抜けたかと思うほどの土砂降りが激しく地面を打ち据えます。樹木が大きく枝葉を振り乱す下、山肌を馳せくだる濁流が土鍋やカルシともどもコロポックルたちを呑みこみ、さらに勢いづきました。その先にあるのは谷。一卷の終わりかと観念したその刹那、訪れたときと同じくらい唐突に雨は上がりました。ずぶ濡れになって取り残されたコロポックルたちは、いくらか正気を取り戻したようです。大量の水を食らって、毒カルシの毒が薄まったのでしょうか。

「これは借りにしとくぞ、アイヌラックル！」と、はるか頭上の黒雲から、聞きおぼえのある声が飛んできます。「カンナカムイ！」わたしは叫びます。「あなたでしたか！ 助かりました！」

雷を操る天のカムイ、カンナカムイはわが妻の兄なのです。「妹からおまえが困っていると聞いてな。駆けつけてきたよ。ハハハハハ！」雲間からチラチラのぞく尻尾は鱗の光るヘビのそれです。「そんなチビどもはうっちゃっとけよ。早くこっちに戻ってこい。また酒でも酌み交わそうや。ハハハハハ！」

おびただしい数の仲間を失い、満身創痍となったコロポックルを連れて、わたしとウパシチロンヌプは帰途につきました。わたしは心身ともに疲れ果てていました。ウパシチロンヌプも相当しよげているはずですが、その顔はいつもと変わらないとぼけ顔です。

「ウパシチロンヌプよ」一言文句をつけずにはいられませんでした。「おまえには本当に失望した。コロポックルともどもアイヌモシリに住むことをせつかく認められたんじゃないか。なのに、おまえは役に立つことをなに一つ、彼らに教えてやらなかった。走るか跳ねるかキョロキョロしてただけだ」

「だって、しょうがないじゃないですか」ウパシチロンヌプは性懲りもなく口答えします。「わたし、なにも知らないんですもの。弓の作り方も魚の干し方もカルシの見分け方もわからない。アイヌにはたくさんのカムイがついていて、おまけにあなたみたいな便利屋さんまでいるんです。なのに、このポンアイヌにはわたししかいない。荷が重すぎるというものです」

「アイヌやカムイを煩わせないと約束したのはおまえなんだぞ」

「わたしなりに努力しましたよ。ですが、できることとできないことがあるじゃないですか。そりゃ、最初はできると思ってましたが、そのときはなにもわかってなかったんです」

「まったく口の減らないやつだ。そんなちっちゃな口のくせに」

「じゃあ、もうなにも言いません」ウパシチロンヌプは本当に口をつぐんでしまいました。こいつもこいつなりにまいているのでしょう。

やっとの思いで帰宅すると、わたしは妻にカムイモシリへの帰還を延期すると告げました。

「まあ！ 雨でも降るんでしょうか？」わたしが頑固なことを知っている妻は心底驚いたようです。「いえ、もう降ったんですよ。それもたつぷりと。雷つきで。そうですね？」

わたしは、このちっぽけで無知で危なっかしいコロポックルをこのままにしておけないからと理由を述べました。最低限のことを教えておかないと、のちのち後悔するに違いありません。妻はウパシチロンヌプと手を取り合って喜びました。「それじゃ、まだ当分はここにいられるのね！ あの子たち、物おぼえ悪そうなもの」

「それはわたしが保証します」ウパシチロンヌプはむしろ自慢するように言うのです。「今日聞いたことは明日には忘れているだろうし、全部おぼえるころには世代がまるごと入れ替わってるでしょう。そしたら、また一からおぼえ直しですよ！」

こいつは調子に乗りすぎです。

実際はそれほど極端なことにはなりません。一通りのことを教え終えると、わたしはなおも洩る妻を連れて、晴れてカムイモシリに戻ることができました。妻は囲炉裏の灰をこねくりまわしては、懐かしい山々やコタン、アイヌ、けものたちの似姿を作り、地上を恋しがっていましたが、いずれは諦めもつくでしょう。わたし自身も地上のことを思い出さないわけではありません。ふと背後を振り返って、アイヌモシリをはるか遠くに見やり、そこで過ごした楽しい日々を思い起こすと同時に、最後の生徒となった小さな者たちに思いを巡らすのでした。あの、そそっかしくも愛らしいコロポックルは元気でやっているだろうか。

「だから、今いるコロポックルよ。よく学び、おのれを知り、そして身の丈に合った暮らしを心がけなさい」と、アイヌの教師であり、コロポックルの教師でもあったアイヌラックルは語りました。

わたしたちのあいさつのポーズは、コロポックルのつくりぬしであるオコジョのかっこうをまねたものです。

「ノンノです」「アチャポです」「カユプケです」となのって、それぞれ右手をあげてから、「3人あわせて」というところでキョロキョロ左右を見るのです。あのヒトはおちつきのないカムイなんです。

きめのポーズもまねっこです。りょうほうのこぶしをまるめて、むねのまえでおりまげ、ポカンとしたかおをするのです。「なにがおこってるんだろう？」というように。

こればかりはなんどやってもおかしくて、じぶんでもふきだしてしまいます。だからはじめて見るヒトは、ふきだすところまでがわたしたちのあいさつだとおもっているかもしれません。

「カッパがいた」そう切り出したのはアチャポだった。「後ろのほうでライブ見てた。何度か見かけた背の低いヒト。だれだろ、ファンかな、お話しできるかな、って思ってたら、風が吹いて帽子が飛んだの。そしたら頭が皿だった！濡れてツルツル光ってた。間違いない。あれはカッパだよ！」

「スンケ ハウエ！」ノンノが言下に否定する。「嘘つけ」という意味だ。「普通の陰気なおじさんだったよ。頭が丸くて禿げてただけで。帽子かぶってるんだから、本人も気にしてる。カッパなんて言ったらかわいそうだよ」

「でもカッパよ」カユプケはアチャポと同意見だった。「帽子かぶってマスクしてごまかしてたけど、目つきだけはごまかせない。水の中に棲んでないと、あんなじめついた目つきにならないもの。思い出ただけで震えが走るよ。ぶるるるる！」

あるいはその目つきなのだろうか？ 三人はいつどこでライブをしても、自分たちを食い入るように見つめる視線を感じてきたのだ。

「ねえっ、きみたちにお客さんだよ！」ライブとライブの合間に、ハカタがいやにうきうきしながらやってきた。「バンドマンだ。同じ路上ライブ仲間として挨拶したいっていうんだよ。だれだと思う？ 聞いて驚くな。ジャジャジャジャーン！ しりこだま！ あの独特の音楽性とパフォーマンスで一世を風靡した伝説のバンドがわざわざ訪ねてきてくれた。名誉なことだよ」

「ふええっ！」「あの伝説の！」「で、どちらさん？」

ハカタの背後から顔をのぞかせた者を見て、三人は凍りついた。「ミントウチ！」と叫ぶや、泡を食って逃げだした。ハカタはあわてた。おーい！ おーい！ 「どうしたんだ？ 待てよ！」いくら声を張りあげようが、もう三人は届かない。「やっぱりね」身長一メートル強のカッパは動じることなくつぶやいた。「こうなると思っていましたよ」

三人がライブ現場に戻ってきたのはそれから一時間後のことだった。カッパの姿が見えないことをしっかり確認してからだ。

「ミントウチだけは勘弁です！ あいつらは不倶戴天の敵ですよ」アチャポはハカタに噛みついた。「いつもじめったところにいる気味悪いやつら。川辺でいつも争ってたんです。沢ガニ、

川エビ、小ブナを取り合いっこして。連中、ものすごく意地汚いんです。おまけに獰猛。いつも被害甚大でしたよ」

「きみらも被害にあったのかい？」驚いてハカタが尋ねる。

「いえ」三人は即答した。

「初めて見ました。そもそも、わたしたちの山にミントウチ、つまりカッパはいませんし」カユプケが説明する。「それを言うなら都会で会うなんて、思いもしなかったですけども」

「話で聞いてるだけだって？ だったらそれは偏見ってもんだ。彼らはいたって気のいいカッパたちさ。四人組のアコースティック・バンドでね。一時はメジャーで活動して、どこへ行ってもキャーキャー騒がれるほどの人気者だった。今はちょっと事情があってインディーズに戻ってるんだ。小さなライブハウスが主な活動拠点だけど、路上ライブも欠かさない。原点を忘れないために。しりこだまも路上ライブから始めた口なのさ。きみたちの大先輩さ」

サポユポ数名に付き添ってもらって、フラグランズの三人はしりこだまのライブに出かけてみた。路地裏の小さな神社の境内にはたくさんの影がひしめいていたが、それはライブにやってきた客であり、今なお根強い人気のあることをうかがわせる。日が完全に沈むのを待って、ライブはだしぬけに始まった。どこからともなくひっそりと音楽が流れだし、しりこだまの四人が神社の裏手から現れた。

音は薄っぺらく、かつ隙間だらけだった。ときに歪み、雑音が混じり、的外れな方角へ飛んでいく。楽器はみんな色あせて古びていたし、そもそも楽器でないものも多かった。木製の風呂桶、自転車のラッパ、巻き取り笛、でんでん太鼓、ノコギリの刃。「好きですね、これは」しかし、フラの三人はすぐに気に入ったようだ。「やっぱり川を感じるね。川面を渡る涼しい風とか、どっかで魚が跳ねる音とか」「川を忘れてないんだよ。川は昔とつながってるから、昔を忘れない音楽だよ。いつ聴いても懐かしい感じ」

たった今、川から這いあがってきたばかりのような、みずみずしいカッパがリーダーのキチクで、もっぱらギターとウクレレを奏でる。のびのある特徴的な裏声の持ち主だった。すぐにも川に戻りたがっているような物憂いカッパがジタキで、ベースの担当。フラのライブをよくのぞいていたのはこのジタキらしい。たがの外れたような突拍子もないカッパがウジイシで、パーカッション担当となっているものの、たたき物、鳴り物、なんでもこなす。ヒトを小馬鹿にしたような洒落者のカッパがチロウヤで、ピアノカ、トイピアノ、アコーディオンの鍵盤楽器が担当だった。

全員が代わる代わるリードヴォーカルをとって、川で溺れ死んだ子供たち、川面を漂うジュースの空き瓶、ゲロゲロけたたましく鳴き交わすカエルの家族、月夜の橋の上で踊り狂うカッパ娘のことを、ときにリリカルに、ときにグロテスクに、演劇性たっぷりにパフォーマンスする。かつて、それらの曲はシングルとして発売され、続々とヒットを飛ばしていたのだ。

では、どうして表舞台から消えたのか？

「いろいろ要因はあったろうけど」ハカタが言いにくそうに説明する。「直接的にはシングル曲『さよなら霊長類』にまつわるトラブルだろうな。地球温暖化を歓迎する反時代的な内容の歌詞が物議をかもした。町も山も残らず水没して、陸に住むサルどもはみんな溺れ死んじゃえбай

いというブラックな展開で、プロモーションの段階から『ふざけてる』『霊長類舐めん』『おまえらが死ぬ』とクレームが相次いだんだ。不買運動が繰り広げられて、陳列台のCDがたたき割られる騒ぎになった。そのゴタゴタが尾を引いて、事務所を解雇される事態にいたった次第」

「歌でケンカ売ったんですか？」フラの三人は驚いた。

「でも、実際は誤解だったんだ。歌詞には間抜けなオチがついていた。全世界がめでたく水没してしまったら、好物のキュウリが食べなくなるし、そもそも海水は塩辛くて、淡水性のぼくらには耐えがたい。それに今ではニンゲンの友達がたくさんできたし、やっぱり温暖化にはご遠慮願おう、というものだ。けれど、そのオチに辿り着くには三番の歌詞まで聞かなくてはならず、そこまで気の長いヒトがいなかったんだな。テレビでもラジオでも流れるのはせいぜい一番どまりで、それも短縮版だったりして。なんとまあ文化的な世の中だこと！」

まだ顔を合わせるのはこわかったので、フラの三人は差し入れを置いただけでその日は去った。どんぐり山の名産であるよもぎ餅が三個だった。「四人に三個というのは、しかし、どうなんだろうな」とハカタは首をひねったが、アチャポは信じられないという顔をする。「一個を四等分して全部で十二個。で、一人が三個ずつ食べればいいんですよ。そんな計算もできないんですか？」

翌週、フラグランスがライブ現場に赴くと、策に入った差し入れが届いていた。採れたての新鮮なキュウリと、それにつけて食べるための柚子味噌だった。すぐにしりこだまからのものだとわかった。道で挨拶を交わしたり、直接言葉を交わすようになるまでにはさほど時間がかからなかった。いったん会話が成立すると、共通の話題が実に多い。川べりの珍味や月夜の夕涼みのご機嫌さ、いやみなブヨについての話で盛りあがると、都会者は口をはさむ余地がなかった。

「メジャーはこわいですよ、ウシシシシ！」いつも薄ら笑いを浮かべているウジイシが本気とも冗談ともとれるような口調で言う。「あなたたちもね、いずれはパーツと花を咲かせて、どこぞのメジャーどころと判子を押しあったりするでしょうが、ライブの日取りだのテレビの収録だの、もう勝手にスケジュールが組まれちゃいましてね、イヤその日は都合が悪いんでご勘弁ご勘弁、なんて断ろうものなら、なにを生意気言っちゃがる、だれのおかげで売れてると思ってる、もうテレビには出さねえぞボケカス低学歴下等動物！」と恫喝ですよ。連中、なにさまだと思ってるんでしょうかね。ウシ、ウシ、ウシシ！」

「ぼくらはインディーズで十分なんです」いつも物静かなジタキが独り言のようにつぶやく。

「バイトをしないでもほどほどに暮らせてますからね。無理する必要ないんです」

「うん、のんびりが一番ですね」ノンノがうんうんうなずいた。

「オオカミがいた」そう切り出したのはノンノだった。「お客さんの足と足の間から、じつとこっちをにらんでた。野生の目をぎらつかせて、牙が槍みたいに尖ってた。間違いない。あれはオオカミだよ！ 絶滅したなんてとんでもない」

「あれはホンムレスのおじさんだよ」カユプケがやんわりと否定する。「髪の毛もお髭ものび放題で、全部灰色になってただけ。目つきが陰しいのは路上暮らしが長いせい。ひもじくて寒くて白い目で見られて、ホンムレスのヒトはつらいもの」

「イヌだと思うけど」アチャポが冷静に指摘する。「首輪をつけてなかったから、たぶん野良犬。お年寄りだけど、そのわりにこざっぱりしてた。だれか面倒見てるのかも。でも、だしたら首輪がないのはおかしいね」

イヌはリードでつながれていたり、飼い主に抱きかかえられているかぎり、それほど警戒する必要はなかったが、自由に歩きまわっているとすれば話は別だ。

「あなたたちに挨拶したいってお客さんがいるけど、今度は逃げないでね」ライブとライブの合間に、オギノが話しかけてきた。「同じ路上ライブ仲間として、あなたたちとお近づきになりたいんだって。知ってる？ 最近すごい話題なのよ。魅惑の混声コーラスを聴かせる路上の人気者、ブレーメンズよ！ いらっしゃい！」

木陰から小走りで駆けてきた者を見て、三人は飛びあがった。「ホロケウ！」と叫ぶや、泡を食って逃げだした。オギノはさほどあわてなかった。待つて！ 待つてよ！ 「ただのおとなしいワンちゃんだよ！」いくら声を張りあげようが、もう三人には届かない。「無理もない」全身灰色の老犬がハッハ息をしながらつぶやく。「戻ってくるのを待ちましょうや」

三人がライブ現場に戻ってきたのはそれから一時間後のことだった。イヌの姿が見えないことをしっかり確認してからだ。

「セタは鎖につないでください！」三人はオギノに噛みついた。「もう寿命が縮まりましたよ」「なに考えてるんですか？ イヌなんかと仲良くできるわけないでしょうに」

「話のわかるワンちゃんなの。話のわかる動物たちがほかにもいてね、四匹で音楽隊を作ってるの。すごいんだよ。どこでもお客さんをいっぱい集めて、もう半端じゃない盛りあがりようで。一度ライブ見てご覧なさいよ。勉強になるから。行きましょう！」

場所は水遊びのできる池のある小広い公園で、石畳の広場は黒山のような人ばかりだった。その中心に居るのは、ギターとクラリネット、小太鼓、バンドネオンを抱えた、制服姿の四人の奏者だったが、彼らはあくまでも伴奏者。主役は彼らの前に立っている、ロバ、イヌ、ネコ、ニワトリの四匹だった。身ぎれいにしてはいるものの、重ねた年齢は隠せない。全員が相当の高齢者だった。イヌはフラの三人が出会った件のイヌに相違なく、痩せて表情も険しかったが、あるいは大勢の客に囲まれて緊張しているのかもしれない。

「それでは、今からブレーメンズのライブを始めます」挨拶をしたのは、やはり青みがかった地味な制服を着た女性だった。「どうか最後までお楽しみください」

控えめな楽器演奏に導かれて四匹がおもむろに歌いだす。言葉は非常にたどたどしく、歌もお世辞にもうまいとは言えない。そもそも歌には聞こえない。ほとんどの部分はただ鳴き、吠え、うなっているに過ぎないので、歌詞内容を知るには事前に配られる歌詞カードに目を通さなければならなかった。毎日重い荷物を背負わされて酷使される苦しみ、鎖に縛りつけられた自由のない日々、今日は首をちょん切られるか明日はスープにされてしまうかと怯えて暮らす寝屋の中、なんの好感も抱けない主にさんざんいたぶられる屈辱を切々と歌い、観客の同情を誘う。すでにこの時点であちらこちらすすり泣きが聞こえ、それに引きずられるようにして涙が伝播する。「歌がお話になってるんですね」フラの三人も思わず引きこまれたようだ。「歌を聞けば、お話が楽しめる。続きを聞かずにいられなくなるって仕組みだ。やるね」「ミウジカルでも見てるみ

たい。踊っちゃいけないけど。これはいいね」

永遠に続くかと思えるほどの苦しみのあと、傷つき、怯え、打ちひしがれた四匹が出会い、一緒に旅をしようという決心を歌った歌は、苦難のうちにありながらも仲間を得た喜びにあふれて、感動を呼ぶ出来栄えだった。ステージがここまで進めば、あれほど不明瞭だった四匹の歌声が俄然クリアに聞こえてくる。歌詞カードの助けを借りなくとも、内容が理解できてしまうのだ。

友を得たと言っても、先が見えないことに変わりはない。力なく、芸なく、容色衰えた彼らにまだ残されていたのは声だった。哀しい優しさをたたえたロバの声、快活な瞬発力のあるニワトリの声、だれの心にもするりと寄り添えるネコの声、人なつこさと猛々しさを兼ね備えた犬の声、それらが混じり合うコーラスはコントラストがきいて意外性にあふれ、自分たちでも驚くほど味わい深かった。この魅惑のコーラスをどこぞのオーケストラに売りこめないか考えた。もちろんつてと言えるものもなく、大きな不安を抱えながらの旅立ちだった。

それだけにクライマックスで披露される勝利の歌は言い知れぬ感動を呼ぶのである。ロバの上にイヌが乗り、イヌの上にネコが乗り、ネコの上にニワトリが乗る場面では、制服スタッフのアシストを得て、それを目に見える形で披露する。不安定な姿勢でプルプル震えながら、小屋に潜む盗賊たちに向かって吠えたける場面では、客も一緒になって、ブオーツ！ ワンワン！ フギャーツ！ コケツコーツ！ 声を張りあげ、狂躁的に盛りあがる。スタッフの扮した盗賊がこけつまろびつ逃げだすと、あたりはもう爆笑の渦だ。腹を抱えて涙を流して、ここで笑わなくていつ笑うんだというぐらいに笑い倒す。最後はテーブルに山盛りの料理を前にしての大宴会。バックバンドは立ちあがって軽快なワルツを奏で、掛け値なしの祝祭気分に見るもの全員が酔いしれる。投げ銭は万札を混じえてバンバン飛ぶし、自主製作のCDも飛ぶように売れるというものだ。

「楽しかったあ！ 感動しました」フラの三人も満足だった。「いいものを見せてもらいました。元気もらった」「誤解してたみたいです。いいヒトたちだ」

「目つきが陰しい？ そりゃ悪かった」件のイヌは万次郎と名乗った。ぶっきらぼうだが気のいい雑種犬だった。「最近とんと目が悪くなってね。おまけにおまえさんたち、べらぼうにちっこいじゃないか。目を細めて細めて細めて、それでも見えん！」

フラグランズの三人は言葉を話す動物とはもともとなじみ深かった。相手に害意がないとわかれば、打ち解けるまでに時間はかからなかった。

「これはいい仕事ですよ」ロバの権之助は上機嫌に語る。「週に一日ショーするだけで、結構なお金になりますから。普段はのんびり過ごしています。お花を眺めて、パンをこねて、懐メロ聞いて」

「なにせ暮らしにくい世の中だ」イヌの万次郎はぼやく。「昔は自由な野良犬暮らしも悪くなかったと聞かす、今はどうだ。首輪にリードなしじゃ、外を歩くことも許されん。まあ、そんなにうろつこうとも思わないがね。どこもかしこもコンクリとアスファルトで覆って、シオンベン引っかける気にもなれん」

「ネコはかわいがられているふうに見えるけど、それはごく一部だよ」ネコの雪之丞は鼻を鳴らす。「いらなくなったら、即ポイだもの。年食って野良になったら、路上で暮らすのも楽じゃ

ない。人殺しの練習にネコ殺すクソガキもいるし。化けて出ようにも今日日のニンゲンはオバケさえ見えないっていうじゃない？ こわがることすらできないなんて、もう救いようがないね」

「われらは交代制なんだ」ニワトリの十兵衛は驚くべき内情を明かしてくれた。「頃合いを見てメンバーを替えて、ブレーメンズとして活動する。控えのメンバーはうなるほどいるし、これからも増える一方だからね。ロバはさすがに少ないから、そのうちポニー、もしくはウマで代用するはず。引退したら？ 団体の仕事を手伝うさ。細かい仕事はいくらでもあるし」

ブレーメンズをプロデュースしているのは救生軍と名乗るNPO法人だった。「捨てられたペットやつぶされる予定だった家畜を引き取って、お世話をしている団体なの」オギノが説明する。「広く一般に引き取り手を探してるんだけど、もちろん全然おっつかない。イヌネコだけで毎年何十万匹も薬殺される棄畜大国だものね、わが国は。ぶんぶん！」

「芸能活動は現在、順調に収益をあげております」現場リーダーだという短髪の女性が語ってくれる。「貴重な財源でありますので、これからも続けていくつもりですが、こわいのは飽きられてしまうことです。メジャー・デビューやテレビ出演の打診もありましたが、すべてお断りしました。あっという間に消費されて忘れられてしまうことだけは避けたかったからです。マスコミへの露出は極力控えて、物珍しさやお涙ちょうだいに頼らない、見ごたえのある公演を実現していきたいと思っています。手を替え品を替え工夫して」

近いうちに専用の劇場を得て、定期公演も計画中とのことだった。さらに、ブレーメンズに続くグループも鋭意準備中らしい。フタツフが扮する桃太郎とそれにつき従うイヌ、キジ、サルからなるにぎやかなピーチ・ボーイズ、十二支に登場する動物のメスだけを揃えた牝十二支楽坊、元気盛りの子犬ばかりを集めた欣喜キッズ等々。

「大変ですよ。生きのびるのは」カユプケがしみじみとつぶやいた。

「マネキンが見てた」そう切り出したのはカユプケだった。「知らんぷりして街角に立って、わたしたちの様子を見てた。冷たい目、動かない目で、わたしたちが歩いて歌っておしゃべりしてるところを残らず見てた。ウェイスネ！ 間違いない。あのマネキンにはウェイスネが取り憑いてるよ」

「オシャレな女のヒトだったよ」アチャポが首をひねる。「スタイル抜群で整った顔の。たしかに心は感じなかったな。でも、心がないんじゃないくて、閉じこもってるんだと思う。なにかひどい目にあって表に出てこれないの」

「アンドロイドじゃないかな」ノンノが声を潜めて言う。「どこかの研究所から脱走して、ニンゲン社会に紛れこんでんだ。気づかないほうがよかったかも。秘密を知ったからにはわたしたちもただじゃすまない。暗殺されちゃう。ヒイイ！」

コロポックルである三人は師匠筋にあたるアイヌと同様、人形に対する警戒心が強いのだ。

「そう言や、きみら、人形にいい顔したことなかったね」オクタは合点がいったように言う。「ステージにお人形さんを置いて、アユタさんなんかが、かわいいかわいい言ってんのに、きみたちはつれないもんだった。まず近づこうとしなかったし、ツーショットで写真を撮るのも乗り気じゃなかった。そうか。そういうことだったか。人形が嫌いなんだ！」

「お人形さん自体は好きですよ」とカユプケ。「ちっちゃいころは葉っぱや布切れでよく作りましたし。でも、遊ぶのはお日さまが出ているうちです。夜になれば、お人形さんにはウェイスネ、邪悪な魂が宿ってしまう。この世に未練たらたら、恨みのこもったウェイスネが乗り移って、生きている者に悪さするんです。だから、お日さまが落ちる前にお人形さんは壊してあげなきゃいけないんです」

「人形なんかどこにでもあるけど？」オクタが呆れる。「街を歩けば、そこらで招きネコ、フライドおじさん、ベロ出す女の子と出くわすし、今どきはごつい野郎のバッグにだってかわいいキャラクター人形がぶら下がってる。UFOキャッチャーはぬいぐるみがぎゅう詰めで、アキバハラはフィギュアがポーズとって勢揃い。ありえないだろ。それがみんな邪悪だなんて」

「邪悪！」ノンノがキツパリ言いきった。「ヒトでないものがヒトのふりするんだよ。どうして邪悪でないわけあるの？」

「えーと、きみたちに会いたいというヒトがいるというか」ライブとライブの合間にオクタはフラの三人に話しかけたのだ。「実際は会いたいなんて言ってないけど、様子を見に来たことはある。ずっと後ろのほうでライブを見てた。きみたちのことはその筋で相当話題になってるからね。ちょっと前から路上でライブ活動している、きみたちの先輩だよ」

オクタが差し出した携帯電話の待ち受けには、着飾った複数のマネキン人形の画像が貼ってあった。

「名前はコストパフォーマンスドール。略してコスパ。七体のマネキンからなるアイドル・グループでね、今度めでたくメジャー・デビューが決まった。ファンはみんな大喜びさ。いや、みんなじゃないな。中には『裏切られた！』って怒っているやつがいるからね。ちょっと挨拶に行ってみない？」

「ママママネキンに挨拶？」アチャポが素っ頓狂な声をあげる。「イテキ イランモッカ！絶対イヤだ」

「行ったほうがいい」オクタは簡単にはあきらめなかった。「芸能界は厳しい世界で、そこに仲間がいるとしないとじゃ大違いだ。味方にできそうなヒトはできるだけ味方にしたほうがいい。挨拶するだけでいいんだ。それでだいぶ違うから。むこうも悪い気はしないはず。行こう。ぼくもついてくからさ！」

コストパフォーマンスドールは駅に近い目抜き通りの広場で大人数に囲まれていた。客はほとんどが男性で、十代から五十代まで幅広い。しかも、全員がカメラもしくはビデオカメラを構えている。

七体のマネキンはファッショナブルな衣装に身を包んで、見た目はとても華やかだった。それぞれが異なるウィッグ、帽子、ファー、腕輪、ベルト、ストッキング、ブーツを身につけて、しかし、その中心にある顔はどれも区別がつかない。スピーカーから流れだす、流行遅れのトランス・ミュージックに乗って、ぎこちなく踊っていたが、もとより動体関節が限られているので、そんな動きしかできないのだ。振り付けは全員が同じだったが、タイミングはしょっちゅうずれ、回転の向きがちぐはぐだったり、移動中に衝突したりと落ち着かない。しかし、それであわてるわけでもなく、客もまるで気にしない。曲には歌声が乗っていて、あらかじめ録音された

音源と思いきや、実際はメンバーがリアルタイムで歌っていた。だが、その歌声は著しく抑揚を欠いており、しかもみんな同じ声。コスト削減のために全員に同じヴォーカル音源があてがわれているのだ。感情の一切こもらない歌とやる気のない踊り、それとは無関係に盛りあがるサウンド。「なんだか、だんだん腹が立ってきました」フラの三人は不快感を隠さなかった。「小馬鹿にされている感じがしますね」「みんなはこれで楽しいんですか？」

客は十分楽しんでいて。頻繁にシャッター音をとどろかせ、レンズをズームアップして、ヒューヒュー！ いいぞ！ エロエロ！ と歓声をあげて。中でもひときわ喝采の大きかったのが曲間だった。

「曲ごとに衣替えするのが見どころでね」オクタがいきいきと解説する。「曲のイメージに合った衣装に着替えることで、より完璧なショーに近づけるというのが公式の見解だけど、見せたいのはむしろ着替えのシーンそのものだろうね」

七体のマネキンがたどたどしい手つきでイヤリング、シャツ、スカート、靴下、下着まで残らず剥ぎ取る過程で、客の興奮は最高潮に達する。全員が絶叫しながら前に詰めかけ、将棋倒しが発生する。悲鳴があがり、怒声が飛び交い、それはときに小競り合いに発展した。やめろよ！ 押すな！ いてえ！ 死ぬ！ クズが！ おまえがな！ しかし、そんな阿鼻叫喚にコスパはまったく頓着しない。淡々と着替えを済ませて、あらかじめ決められた作業をこなすだけだ。ファンがいくら揉めようが流血沙汰になろうが死んでしまおうが、なんの関心もないのである。

「そこがまたいいんだよなあ！」オクタは感極まったように叫んで、フラの三人の呆れ顔に気づく。「って、熱心なファンは語るわけだよ。そのクールさがたまらないって」

ライブ後はデビュー・シングルの即売会が始まったが、用意されたCDはまたたくうちにはけた。ただ、そのCDは開封されるや否や、ほとんどが道端に捨てられる運命だった。ファンの目当てはCDに封入されている握手券であって、銀色の円盤なんぞに用はないのだ。

フラグランズの三人は捨てられたCDの山を乗り越えて帰ろうとしたが、オクタが必死に引き止めた。「待て待て」「せっかく来たのに」「スタッフとはもう話がついてるからさ」「むこうもきっと会いたがってる」

しかし、会いたがっているなど、とんでもない。コストパフォーマンスドールの七体はフラグランズの三人に徹底してつれなかった。

「だれか来て。虫いるよ虫虫。殺虫剤持ってきてよ」「知ってるよ、この子たち。どっかの冴えない連中のマスコットでしょ」「ノミみたいにピョンピョン跳ねて超ウザいのよね」

同じ声と平板な口調で、コスパのメンバーは三人を容赦なくこきおろした。感情がこもっていないので、そこに悪意があるとはすぐには納得できず、対する者はどう反応していいやら困ってしまう。

「このたびはメジャー・デビューおめでとうございます」アチャポがおそろおそろ挨拶する。「いろいろ教えてもらいたかったのですが、残念です。お活躍をご祈ります」

コスパたちは鼻を鳴らさなかった。マネキンには鼻孔が開いていないからだ。

「あんたも相当心のこもってないセリフね」「一所懸命おぼえてきたんでしょ。小人だもんね。脳味噌も耳クソ程度」「挨拶は終わったよ。帰ったら？ わたしたちも暇じゃないんだ

から」

「まあまあまあ」そこへ割って入ったのは、コスパのマネージャーだという初老の男性だった。スキンヘッドに豊かな口ひげをたくわえていたが、ニコニコとして愛想がいい。「話題の小人さんたちがわざわざ訪ねてくれたんじゃないか。かわいい後輩になにか一つアドバイスでもどうだね？」

「ない」「背い伸ばせ」「歌手やめな」「山へ帰れ」

マネージャーがやれやれと肩をすくめる中、「なに言うんですかあ！」とアチャポが意外な剣幕で食ってかかった。「わたしたちはやめるわけにはいかないんですよ。もっとちゃんとしたこと言ってください！」

「なに、この子？」「生意気」「図に乗るな」コスパたちも心なしか気色ばんだように見えた。「わたしたちと対等だなんて思わないことね。あんたらがやってるのはおままごと。わたしたちは体を張ってんの」「やる気がないように見えるだろうけど、精いっぱいやってあれなんだからね。血の吐くような思いで、あれくらいしか動かせないの」「わかる？ 役立たずだって思われたら、即処分される運命だもの。マネキンなんていくらだって替えがあるんだから」

「おおっと、今のは問題発言だよ！」マネージャーがおどけて言う。「みなさんに誤解を与えるじゃないか。役立たずなんて一人もいないよ。処分なんてとんでもない。失言したのはどの子かな？ 声が同じだからわからないぞ。こりゃ、全員にお仕置きかな。アハハハハ！ 冗談冗談。さあ、きみたちも笑って笑って！」

ノンノとカユプケはエヘへと愛想笑いしたが、アチャポはむっつりしたままだった。

「いやあ、なかなか貴重なアドバイスだったねえ」額から滝のような汗を流しながら、ことさら陽気にオクタが言う。「彼女たち、口は悪いけど悪気はないと思うんだ。なんというか、芸能界の厳しさを身をもって教えてくれたわけで。表ではいい顔して、裏で悪口言うよりよっぽどいい。爽やかと言ってもいいくらいだ。うん、きっとそういうことだ。そうに決まってるさ。アハ、アハ、アハハ！」

「ええ、勉強になりました」アチャポが神妙な面持ちで言う。「自分たちがまだまだだってことがわかりました。まだまだ甘さんです。甘ちゃんだっけ？ 気を引き締めてやっていきたいと思います」